



**公開授業研究
実践報告**

国 語 科

価値の多様性を模索し、言葉による 見方・考え方を広げる評価読みの指導

－協働的な学習を通して、批判的な分析力
を高める授業づくり－

松渕 烈子 伊藤 郁子 佐藤 優子



I 研究テーマについて

来年度から新学習指導要領のもとでの国語の授業が始まるが、そこでは生徒の「思考力・判断力・表現力」を高めるために、授業実践の質を向上すべきことが求められている。社会の変化が加速度を増す中で、2030年頃の社会を見据えながら、子どもたちに求められる資質・能力としての「思考力・判断力・表現力」を的確に捉え、伸ばさせる取組の蓄積が必要とされる。本校の今年度の研究主題は「共に未来を切り拓く 開かれた個～批判的思考力を磨く授業実践～」である。国語科の特質は、「言葉を根拠にして考えること」である。具体的には、「自分の思いや考えを深めるために、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること」であると考えられる。国語科の「見方・考え方」をふまえ、変化の激しい社会を生きる上で必要な力とは何かと考えたとき、それは、文章やメディアを主体的・批判的に読み抜く力であり、また、適切な言葉で自分の思いを表現し、言葉を介して互いを知るための言葉を使う力である。よりよい言葉の使い手を育てるには、課題を見付け、物事を判断するための情報を収集し、解決を目指す主体的な学びが必要である。

1年次研究では、物語の表現技法を手がかりに場面ごとの読解にとどまらず、全体を関連付けて構造的に読むことや、各場面や登場人物、情景描写等の必然性を意識できる読みにつなげることができた。2年次研究では、説明的文章においても、筆者の言葉の使い方、表現の工夫に着目し、細部にこだわって読み進めることで、根拠を明確にして、主張を捉えようとする意識の変容を生徒の発言や振り返りシートから把握することができた。これまで身に付けた言葉の力を生かし、言葉による見方・考え方を広げていくことは、多様な価値観を受容し、それを吟味し、自己の変容へとつなげる活動に他ならない。その過程の重要性を鑑み、国語科の研究テーマを「価値の多様性を模索し、言葉による見方・考え方を広げる評価読みの指導」とした。

2年次研究では、国語科としてのミエルトークの効果的な活用法を授業改善の柱に位置付けた。書き手の意図について深く考えるきっかけになる発言が各班で見られた点で、ミエルトークはある程度機能していたと思う。しかし、表現を手がかりに論理の構成にも目を向けさせるための手立てが不足していた。グループ内でも、文脈に気付いて発言していた生徒がいたが、その声を意味付けて取り上げるまでには至らなかった。個の発言がグループ内で共有された後、全体の場で再度検討するという過程をどう提示し、話し合いの必然性を増すためにグループの意見をどう生かしていくべきかが課題であると改めて感じた。そこで、今年度の研究のサブテーマを「協働的な学習を通して、批判的な分析力を高める授業づくり」とした。

本校国語科における批判的思考力の捉え

国語科における批判的思考力は、文章を文字通り受け止めるだけではなく、生徒同士が本文を根拠にしながら考えを深め、お互いに語り合いながら、批判的に読解を深めた先に、お互いの考えを共感的に理解する姿である。

本校の国語科は、「クリティカルリーディング」（評価・批評的読解）をコンセプトとして授業研究を続けている。「評価読み」とは、読んだ文章に対して感想や意見をもったり、批判や批評をしたり、書き換えをしたりする主体的な読みである。主体的な読みとは、文章を文字通り受け止めるだけでなく、自分で考え、判断しながら読むことを指している。そのように読む姿勢を育てるには、「この表現で書き手（話し手）が伝えたいことはどういうことだろう」という意識を常にもたせ、仮に一定の方向性が示された場合には、多面的・多角的な視点で思考力を発揮させるよう文脈から根拠を引き出すことが重要であると考えます。

II 研究内容について

1 本年度の重点

- (1) 言葉や表現技法を手掛かりに細部を分析しつつ、全体を構造的に読む力を高めるための指導の工夫
- (2) 個々の読みを全体で共有したうえで、多面的・多角的に課題解決するための手立ての工夫

2 研究の方法

- (1) 「分析的に読む」ためには、分析の方法を知り、文中の根拠を基に自分の考えをもつことが大切である。国語における「分析」では、言葉の使い方や表現技法の細部にこだわるあまり、全体の構成との緊密な関係に気付かずに読み進めている生徒も多い。文末表現や助動詞の使い方についても、文法的な理解の上に、文脈の中で書き手の意図を捉えようとすることは、「意外性」に気付くと同時に、語彙力と表現力の伸長につながると考えている。自分の言葉をもちながらも、自己の思考に固執することなく、他の生徒の柔軟な発想力を大切にできる授業づくりを進めていきたい。
- (2) これまでも「個⇄小グループ⇄全体」と話し合いを広げていく言語活動を設定してきた。2年次研究から引き続き、「ミエルトーク」の国語科モデルを構築することで、学習過程の共有を図り、伝え合う力を高め、個の表現力の向上につながる手立てを講じたい。国語科モデルにおいてミセルさんの果たす役割は大きく、根拠を常に意識しながら、友達の意見を聞き取り、ポイントを端的にボードに表現するという力は、話し合いの深化に不可欠である。また、グループ内で、課題の本質に気付いて発言する生徒の声を「質的な違い」として取り上げ、全体に紹介するには、教員の観察力とコーディネート力が求められる。個の発言をグループ内で共有させた後、全体の場で再度検討するという過程を提示することで、価値の多様性を実感できる授業作りを目指したい。

Ⅲ 令和2年度の実践記録（秋季授業研究）

－授業記録（第1学年）－

1 単元名（題材名・主題名）

「少年の日の思い出」－導入部の問い直しを通して作品世界を深く読み味わう－

2 批判的思考力を磨く場面

(1) 言葉を手掛かりに細部を分析しつつ、全体を構造的に読む力を高めるための指導の工夫

場面と場面の結び付きへの意識を高めるために、本文中のさまざまな仕掛けや伏線の細部を検討した上で、クライマックスと関連させた読み取りを行った。また、物語の構造の効果を理解し、評価的・主体的に読む力を養うために、物語の筋と直接関係の無い導入部が置かれていることの意味について考える学習活動を設定した。

(2) 個々の読みを全体で共有した上で、多面的・多角的に課題解決するための手立ての工夫

個→小グループ→クラスへと話し合いを広げるだけでなく、新しく出てきた課題を再度小グループに戻す場面を設定した。

3 全体計画（9時間）（「全体的な指導の構想」、「本活動内容の指導計画」）

主 な 学 習 活 動	・ 指 導 の 手 立 て ◆ 批判的思考力が磨かれていると捉えた生徒の姿	時数
<ul style="list-style-type: none"> 通読し、クライマックスはどこかを考えて話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師が範読する。 作品の主題を考えながら読み進められるように、クライマックスの定義を提示する。 ◆展開部のちょう集めへの熱中が描かれている場面や導入部、「もう償いのできないものだということを悟った」などを踏まえ、「僕」とちょうとの強いつながりから、クライマックスを考えることができている。 	2
<ul style="list-style-type: none"> 作品の構成と語り手を整理する。 初発の感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> これまでに学習した物語を挙げ、作品の構成や語り手について、比べて考えるように指示する。 前半と後半で「時」と「語り手」が変化していることが分かるように構造を図示する。 後半部分が「展開部」「山場」の二つに分けられることに気付けるように、「後半を二つに分けるとしたらどこか」と問いかける。 本文を読んで疑問に思ったことや読み深めたいと思ったことを挙げるように指示する。 	1

<ul style="list-style-type: none"> ・ちょう集めへの「僕」の熱情と、そのことを周囲がどう見ていたかを読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「熱情」という言葉の意味を全員で確認し、それにつながる「僕」の行動についての描写を見つけるように指示する。 ・ちょう集めに熱中している「僕」を、周囲の人たちがどのように見ていたかが分かる表現を見つけるように指示する。 ・「僕」のちょう集めへの熱情がどのようなものであったかを、表現に即して考えるように指示する。 ◆ちょうへの強い熱情が、ちょうを盗む場面やエーメールに対する心情、クライマックスの悲しみとつながっていることに気付いている。 	1
<ul style="list-style-type: none"> ・エーメール像を読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・エーメールについて描かれている表現を見付けるように指示する。 ・本文に描かれているのは語り手である「僕」から見たエーメールであることに気付けるように、一人称語りの特徴を思い出すように問いかける。 ◆一人称語りの特徴を踏まえて、エーメール像があくまで「僕」から見たものであることに気づき、それが「僕」の熱情と関係していることに気付いている。 	1
<ul style="list-style-type: none"> ・「僕」とエーメールの価値観の違いを読み取る。 ・二人の価値観の違いを踏まえて、謝罪の場面のすれ違いを読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「僕」とエーメールの価値観の違いに気付けるように、二人のちょう集めの仕方やコレクションへの思いが分かる表現を見付けるように指示する。 ・ちょう集めへの価値観の違いを踏まえて、謝罪の場面のエーメールと「僕」の心情を考えるよう問いかける。 	2
<ul style="list-style-type: none"> ・「僕」がちょうをつぶしたのはなぜかを考えて話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クライマックスの場面であり、これまでに読み取った要素とのつながりを踏まえて考えるように指示する。 ◆これまでに読み取った「僕」の熱情や、エーメールとの価値観の違いなどを踏まえてちょうをつぶした「僕」の心情を考えている。 	1
<ul style="list-style-type: none"> ・導入部があることの効果について考え 	<ul style="list-style-type: none"> ・導入部があることの意味について考える上で 	本時

る。	着目する表現を選び、「僕」の心情を読み取る。 ・過去の出来事が現在の「僕」によってどのように捉えられているかに気付くことができるように、後半部分と関連付けて読むように助言する。 ・「時」と「語り手」に着目するように助言する。 ◆導入部の「僕」の心情を的確に読み取った上で、作品全体における導入部の意味について考え、物語の構成のもつ効果に気付いている。	9/10
・「導入部があるのとないのとではどう違うか」というテーマで批評文を書く。	・これまでに考えたことを生かして書くように指示する。	1

4 授業の実際

過程	学習活動 ■教師の発問等	教師の手立て ○見取った生徒の姿
問 い の 練 り 上 げ ・ 課 題 設 定	1 本時のめあてを確認する。 ■「導入部について、何か疑問をもった人はいますか？」 ■「導入部があることの意味は何なのかを今日は考えていきましょう」 2 導入部があることの意味について考えるために、読み取るポイントを絞る。 ■「導入部の中で着目したい表現を事前に挙げてもらったところ、次のことに関わる表現を挙げた人が多かったように思います。そこで、このことについて読み取ってみたいと思います」	導入部を拡大した本文を掲示しておく。 導入部の本文シートを各班に1枚配付しておく。 「導入部はいらぬのではないかと疑問に思いました」 めあてを掲示する。 「導入部があることの効果を考えよう」 問いを掲示する。 「クジャクヤママユをめぐるさまざまな出来事は、大人の『僕』の心の中でどんなものになっているか」
	3 「客」(=「僕」)にとってクジャクヤママユをめぐる出来事がどのようなもの	

課
題
追
究
・
問
い
直
し

になっているかを読み取る。

■「各自で、クジャクヤママユをめぐる出来事が大人の「僕」にとってどのようなものなのかを読み取れる表現を三つ以上探して、そこから読み取れることを書き込んでください。」

■「次に、グループで話し合っ、本文シートに線を引き、どんなことが読み取れるかを余白に書き込んでいきましょう。」

■「出てきた意見を発表してください」

■「これはどれくらい前の話だっけ？星の花の主人公は何年前のことを引きずって

現在の「僕」によるクジャクヤママユ事件の受けとめを意識的に読み取るために教科書に赤ペンで線を引くよう指示する。



- 「204ページ3行目の『残念ながら自分でその思い出をけがしてしまった』というところから、あまり良い思い出でない、思い出したくないということが読み取れると思います」
- 「エーミールのせいではなく、自分でけがしてしまったと思っていることがわかると思います」
- 「自分の罪を認めているということだと思います」
- 「本当は楽しい思い出だったはずなのに、自分でそれを嫌な思い出にしてしまった、と言っています」
- 「最後の段落の『薄暗がり』という情景描写から、この話が暗いということ、『僕』の受けとめ方が示されていると思います」
- 「『もう結構』というところから、嫌な思い出として思い出していると思います。今でもトラウマになっているのだと思います」
- 「『一つのちょうを、ピンの付いたまま箱の中から用心深く取り出し』から、昔のことがあって注意して扱っているのだと思います」
- 「『その思い出が不愉快でもあるかのよう』から、良い思い出でないということが読み取れると思います」

○「一年前です」

いたんだっけ？」

■「ではこれは？」

■「そうですね。三十年前のことをまだひきずっているっていうこと。五年とか十年でもない。ここからどんなことが言えると思いますか？班で話し合ってみてください」

■「では、こういうネガティブな、否定的なこととは逆にちょっと肯定的なポジティブな、少し前向きな気持ちが読み取れるところは無いかな？話し合ってみよう。」

■「最初の感想で何人かが書いていたけど、普通だったらこうはしないのにな、と違和感をもったところが導入部でありませんでしたか？」

○「三十年前！」

○「ちょうど思い入れがあるからだと思いました。それがないと三十年も前のことを覚えていないと思います」

○「人生で一番後悔しているのではないかと思いました」

○「償いのできないものだど悟ったとあったように、生き方が変わって、今につながっているから覚えているのだと思います」

○「『羽の裏側を見た。』から、自分が熱情的だったから、こういう癖があるんじゃないかと思いました」

○「『私のちょうは、明るいランプの光を受けて、…光り輝いた』から、明るい、きらびやかに光り輝くという、過去のイメージとは違う明るい表現だと思いました」

○「『私たちは、その上に体をかがめて、美しい形や、濃い見事な色を眺め、ちょうの名前を言った』というところから、少年の頃の良い思い出を思い出していると思います」

○「『彼が見せてほしいと言った』というところから、子供のころの熱情的な気持ちが戻って、わくわくしていると読み取れると思いました」

○「『彼は微笑して』とあるので、こんなこともあったな、という気持ちではないかと思いました」

○「『熱情的な収集家だったものだ。』から、昔のことをひきずってはいるが、自分でそう言っているということはプラスの気持ちだと思います」

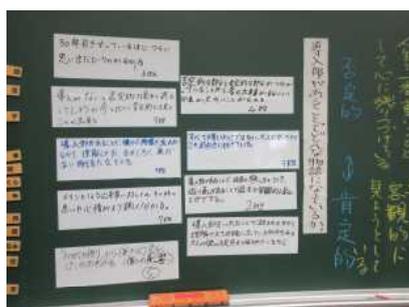
○「恥ずかしい思い出だったら言わなくてもいいのではないかなと思いました」

■「そうだよな。ひとつ聞いてもらおう、と自分から話し始めています。教えて、と言われたわけでもないのに自分から話している。ひきずっているというだけではない、少し前向きなところも読み取れるね。こんなふうには、否定的な気持ちが読み取れる一方で、前向きなものも読み取れる、と言えますね。でもどちらの方が重いと思う？」

■「そうだね。もう乗り越えた、ということではない。もしそうなら、もう結構と不愉快そうに言ったりはしないだろうね。やはり、まだこのことを心の中に重く引きずり続けている、だけど一方で距離を置いて見ようとし始めている、という『僕』の今の気持ちが読み取れると思います。」

4 導入部があることによって、どんな物語になっているのかを考えて話し合う。

■「ここまで読み取ってきて、導入部があることでどんな物語になっているのかということホワイトボードを使って話し合ってみよう。」



○「うーん。否定的なほう！」

各班の結論ボードを黒板に貼る。

○「三十年も覚えているほど、印象が強かったということがわかると思います」

○「『そのとき、初めて僕は～悟った。』というところは僕にとって大きな変化があったところで、三十年ぐらいたって、僕が変化を受けてどのように未来の生き方につながっているかが見えるのではないかと思います」

○「自分がつぶして否定的な感じで終わってしまうけど、導入部があることで、肯定的な見方ができる自分もあるということがわかるのではないかなと思いました」



	<p>■「みんなは12, 3年しか生きていないからピンとこないかもしれないね。私自身もいろんなことを引きずったり乗り越えられなかったり, 今でも思い出したくないことももちつつ, 今の私があるんだな, それも私の一部なんだなと思います。」</p> <p>■「次回は批評文を書いてもらいます。この作品のどういうところが優れているかというのを書いてもらいたいと思います」</p>	
<p>ま と め ・ 振 り 返 り</p>	<p>5 まとめをする。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>板書や教科書の書き込みを見ながら一時間の自分の思考を整理し, 振り返りカードに本時の学習で考えたことなどを記入するよう, 指示する。</p> </div>
<p>《生徒の振り返りから》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入部があることで, 昔の「僕」は否定的で終わってしまっているが, 今は肯定的な自分もいるということが分かり, 比べることができると思いました。 ・少年の日の出来事後, 何十年後の「僕」がいることで, どう変化したかが分かる, という意見に納得しました。 ・導入部は伏線になっているだけでなく, 「僕」にとって事件がどれほど大きいものを伝えるという効果もあると知りました。 ・「客」は, 三十年たった今も心に残っている過去を客観的に見ようとしていることが導入部から読み取れました。 		

5 省察

本年度の重点である「言葉や表現技法を手掛かりに細部を分析しつつ、全体を構造的に読む力を高めるための指導の工夫」を踏まえ、本教材では場面と場面のつながりを捉えて読むことや、物語の構造がもつ効果について理解し、物語を評価的に読む観点を得ることを大きなねらいとして指導計画を立てた。毎時間の振り返りや学習を終えての生徒の感想からは、「僕」のちょうへの激しい熱情が、エーミールへの見方やクジャクヤママユを盗むという行為、エーミールとのすれ違い、さらには結末部分のちょうをつぶす場面の「僕」の悲しみへとつながっていることを理解できた生徒が多いことが感じられた。物語のディテールの一つ一つが有機的につながってクライマックスへ収斂していることを生徒が実感できたことは今回の成果である。また本時の学習を通して、導入部を置くことによって少年時代の経験が単なる思い出ではなく、大人になっても今の自分とつながっていることを描いていると気付いた生徒は多かった。これにより、物語における導入部が単なる前置きではなく、主題と深く関わっていることを理解し、評価的に読むための一つの視点を獲得させることができたのではないかと考えている。

もう一つの重点である「個々の読みを全体で共有したうえで、多面的・多角的に課題解決するための手立ての工夫」については、グループでの話し合いから出てきた解釈を全体の場で整理したうえで、別の方向性や視点から疑問を投げかけて再度グループでの検討を経て全体で共有するという過程を一時間の授業の中に組み込むことを心がけた。この活動を通して、複数の視点から作品を批評するという評価読みの一つの方法を経験させることを目指した。

導入部の意味を考えることは、中学校1年生にとって難しい課題であったが、事件の数十年後を描くことにより、物語に深みや奥行きが増すことを感覚的につかめている生徒は多かったようである。ただ、その理由を言語化することは抽象度の高い作業であり、求めている結論に到達させようとするあまり、教師のしゃべりすぎや誘導的な展開につながってしまったことが反省点である。

教師が意図した読みに生徒を到達させることに固執して、生徒が主体的に教材を読むことを妨げてはならないが、生徒たちが容易に気付くレベルのことだけを取り上げるのではなく、文章を読むことの深い楽しみや高度な認識に到達できるような授業を実現したい。教材文を自分で読み取ったという手応えと自信を生徒にもたせるようにし、かつ高度な読解をクラス全体のものとしていくには、どんな授業をすればいいのか、また「ミエルトーク」などをどう活用していけば効果的か。今後の課題としたい。

—本実践から見えてくること—

**「言葉による見方・考え方」を
生かした先進的な小説の授業
—作品全体の構造を俯瞰しながら
表現にこだわりつつテーマに迫る**

研究協力者：阿部 昇
(秋田大学 大学院教育学研究科)

「言葉による見方・考え方」を最大限に生かした小説の授業

2018年学習指導要領で重視されている「言葉による見方・考え方」は、その内実が掴みにくい。そのため「言葉による見方・考え方」を生かして授業を展開している国語の授業は全国的にも少ない。そういう中で松渕先生の今回の授業は、見事に「言葉による見方・考え方」を生かした授業となっている。それによって子どもたちは高い言語能力を獲得している。

松渕先生は、「導入部があることの効果を考えよう」というめあてを切り口に、小説の全体構造を俯瞰的に読ませている。導入部の仕掛けに着目させながら、それを作品後半の山場のクライマックスと関係づけていくというダイナミックな授業展開となっている。それによって、子どもの時の「僕」と蝶との関わりが、数十年経過し大人になった現在の「僕」にとってまだ大きな意味をもっていることが判明する。これこそがこの作品の重要なテーマである。

この小説を構造的に読むという切り口は、「言葉による見方・考え方」そのものである。これまで国語の授業で、こういう観点が弱かった。

構造的な読み方と同時に一語一文に焦点化していく読み方を重視している

松渕先生は、一方で導入部の一語一文への焦点化も重視している。先生の「クジャクヤママユをめぐる出来事が大人の「僕」にとってどのようなものなのかを読み取れる表現を三つ以上探して、教科書に線を引いてみましょう。」とい

う発問が効果的である。それによって、子どもたちはクライマックスにつながる重要な表現に迫っている。「自分でその思い出をけがしてしまった。」「その思い出が不愉快でもあるかのように」「もう、結構。」など作品の鍵（急所）となる部分に子どもたちは着目し読みを深めている。

これが、今述べた「僕」と蝶との関わりが、大人になった「僕」にとってどういう意味をもっているかの追究につながっていく。

「肯定・否定両面から作品形象を読む」「普通と違う言動・表現への着目」という「言葉による見方・考え方」

松渕先生は、子どもの時の「僕」と蝶との関わりが、数十年経過し大人になった現在の「僕」にとってもまだ苦い思い出であることを読むだけで終わらせない。「こういうネガティブな、否定的なこととは逆にちょっと肯定的なポジティブな、少し前向きな気持ちが読み取れるところは無いかな？」という発問をする。さらに「普通だったらこうはしないのにな、と違和感をもったところは導入部ではありませんでしたか？」という助言もする。それらによって、子どもたちはこの作品のあたらしい側面を発見していく。

子どもから「恥ずかしい思い出だったら言わなくてもいいのではないかと思います。」という発言が出てくる。「私」が話してほしいと頼んだわけでもないのに、大人の「僕」は「ひとつ聞いてもらおう。」と言い出していることに気づく。つまり、数十年経過した現在でも苦い思い出であることは確かだが、一方でそれを友人に語るができるようになってきているということである。松渕先生は「一方で距離を置いて見ようとし始めている。」と整理しているが、新しい切り口から導入部を多面的に再読している。

「肯定・否定両面から作品形象を読む」「普通と違う言動・表現への着目」も、重要な「言葉による見方・考え方」である。

松渕先生の授業は、「言葉による見方・考え方」を生かし育てることに成功した先進的なものであり、子どもは高い言語能力を身につけている。

英 語 科

話し合いの中で課題解決する力を育む指導

ー協働的な学習を通して、

確かな表現力を高める授業づくりー

保坂 美紀子 菅原 芳行 澁谷 優夢



I 研究テーマについて

英語科の特質は、英語をツールとして、世界の人々とコミュニケーションを図り、世界の文化や事象に触れることである。インターネットの普及によりグローバル化が急速に進展する現在において、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。そうした社会を生きる生徒たちに必要な資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）を身に付けさせるために、教科等横断的な学習を充実することや、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことが求められている。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、中学校指導要領解説外国語編によると、外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」であると考えられている。

本校英語科では、英語をコミュニケーションのツールとして捉え、自主的に自分の考えを伝え、仲間とのやりとりなどを通して得た情報を精査し、自分が発信する表現をより確かなものにしていくことができる生徒の育成を目指したい。そのため場面設定を工夫し、ペアやグループによる課題解決学習に取り組み、多面的・多角的な視点をもって追究していく姿勢を身に付けさせたい。

1年次研究では、ミエルトークの手法を用いて、ブラジルの問題について、「自然」「経済」に分かれて解決策を話し、考えの共有化を図った。例えば「アマゾンには世界の財産だから、ブラジルの人には他に土地を探すべきだ。」「経済を立て直すために、森林を切るのは仕方ない。」という意見に、"Why do you think so?" "I don't agree with you because..."などディスカッションを続け、異なる文化や社会的な問題に興味をもたせることができた。

2年次研究では、より意見を深めるために、ミエルトークに問い直しの手法を導入した。home groupで自由に意見を出させた後に、「自然」と「経済」のexpert groupに分け、それぞれの分野の意見を高めていった。さらに意見を深めさせるために、教師側から新たな視点を与えることで活発な話し合いができた。批判的思考力の観点で問い直しをすることによりバランスの取れた、説得力のある意見につなげることができた。

今後は、発達段階や個人の習熟度によりそれぞれの表現力に差はあるのが実情だが、説得力のある文章構成で話をすることを意識させ、確かな表現力につなげていきたい。また、話の間合いや強弱、ジェスチャーを効果的に用いているかなども仲間同士で練り合うことにより、個々の表現力をより確かなものにしていきたい。

【本校英語科における批判的思考力の捉え】

国際社会の一員として、互いに問い直し、結び付けながら多面的・多角的な視点から論点を捉え、発信していくための思考力

そのような力を身に付けさせるためには、先ず課題の背景を知り、理由を明らかにしながら自分の意見をもつことが大切である。その上で互いの意見を比較し、視点を変えながらすり合わせたり練り直したりしてバランスの取れた解決に結びつけていくことが重要であると考えます。

2年次研究テーマ

話合いの中で課題解決する力を育む指導
－様々な意見を論理的に整理し、伝える授業作り－



2年次研究仮説

互いに意見の共通点や違いを明確にし、意見を整理しながら関連付けたり、理由を付け加えながらまとめたりすることによって、問題解決のためにより説得力のある内容で自分の考えを伝える力が高まるだろう。

1年次研究テーマ

話合いの中で課題解決する力を育む指導
－批判的に聞き合うことから意見を深める授業作り－



1年次研究仮説

互いの意見の共通点や違いを明確にし、理由の比較や付け加えを行いながら理解を深める話合いを通し自らの考えを省みることによって、より説得力のある表現をする力が向上し、課題解決をする力が高まるだろう。

II 研究内容について

1 本年度の重点

- (1) 多面的・多角的な視点に気付く課題設定の工夫
- (2) 確かな表現力を育成する手立ての工夫

2 研究の方法

- (1) 多面的・多角的な視点に気付く課題設定の工夫

○意見を伝え合いたいと感じるトピックの選定

本校が採用する New Horizon は、1 年生は学校生活での場面、2 年生に海外旅行や職場体験など学校外での場面、3 年生は国内外で目にする社会問題や科学技術の発展などの私たちの生活の接点を意識させる場面が、主に設定されている。こうした年次ごとあるいは単元ごとの題材を考慮しながらも、生徒の発達段階や興味・関心、教師の生徒に対する期待度に応じて、表現活動が活発になるようなトピックを選定するようにする。

○意見と根拠を的確に発信し、受信する練習

多面的・多角的な視点に気付くためには、自らの考えを相手に伝える際に自分の考えをより具体的に言語化できることや、相手の考えを受け入れる際に自分の考えとどのような点で共通し、どのような点で異なっているのかを整理できることが大切である。これを進めていくためには、例えば自分の意見を伝える際にその根拠を明らかにする、または質問した際に自分の考えを添える会話練習が有効になる。そして、ミエルトークの活用や、ペア・グループ・一斉の各集団での表現活動などを通して考えを共有することにより、さらに多くの異なった意見・根拠に触れさせる。

(2) 確かな表現力を育成する手立ての工夫

○言語表現を運用する場面の明確なイメージ化

授業で得た言語表現は単なる知識にとどめておくべきではなく、普段の授業においてもなるべく実際の使用場面を意識させておきたい。When? (日時・年代), Where? (場所), Who? (話し手と聞き手), What? (内容), Why? (理由・目的), How? (やりかた) をもとに、伝える相手が友達か目上の人かによって話し方やジェスチャーなどが異なることを意識させ、自然なやり取りを行うことができるように支援する。

○生徒一人一人が伝えたい表現を支援する

生徒の表現したい思いを大切に、授業中の支援や自主的に学習する姿勢を醸成し、個々の表現に自信をもたせる。

○説得力のある表現や発信方法を身に付けさせるための工夫

文章校正や話し方、目線、声量、ジェスチャー、ICT等の効果的な活用により、より説得力のある発信ができるようにする。また、様々なトピックでミエルトークやミニ・ディベートを行うことにより、意見→根拠を I think (that) や if, when, because, so などの接続詞や賛成か否かを伝えたりするフレーズ等を効果的に用いて、順序立てた話の伝え方を意識するように支援する。

Ⅲ 令和2年度の秋季授業研究の記録

－授業記録（第2学年）－

1 単元名

「Presentation 2 町紹介」

2 批判的思考を磨き合う場面

(1) ミエルトークの充実

学習班ごとに対象を限定して（外国人・高齢者・若者），秋田のためにどんな取り組みをすべきか話し合い活動を行った。

(2) ICT機器やWEBサービスの活用

各生徒がタブレットパソコンを用いて，教育系SNSである Edmodo 上にアップロードした動画にコメントを入力したり，ホワイトボードのツールである Jamboard をWEB上の付箋ツールとして活用したりして，ミエルトークに役立てた。

3 全体計画（総時数12時間）

Unit 6（8時間）

主な学習活動	指導の手立て	時数
<ul style="list-style-type: none"> 英語落語の講演ポスターを読んで，日時や場所，描写する英語の内容を読む。（理解） there is (are)～構文の用法を押さえる。（知識）（表現） 	<ul style="list-style-type: none"> there is (are)～構文に慣れさせるために，現在と過去の町の様子を比較する場面設定を行う。 	1
<ul style="list-style-type: none"> 落語の会場にあるものや，自宅の近くなどにある施設について尋ね合う。（知識）（表現） 	<ul style="list-style-type: none"> Is (Are) there ～の表現を定着させるために，2つの部屋の中の様子をインフォメーションギャップを用いてペアでインタビューを行う。 	1
<ul style="list-style-type: none"> 英語落語の講演パンフレットを読んで，落語の海外の広まりについて読み取る。（理解） 動名詞の用法を押さえる。（知識）（表現） 	<ul style="list-style-type: none"> 海外における日本文化の広まりについて興味関心をもたせるために，実際の英語落語講演を聞く。 	2
<ul style="list-style-type: none"> 英語落語の小断を読んで，その内容を理解したり，落語の内容の面白さが相手に伝わるように音読したりする。（理解）（表現） 	<ul style="list-style-type: none"> 英語落語の面白さが伝わる部分を考え，イントネーションやジェスチャーに留意しながら音読する。 	2
<ul style="list-style-type: none"> 英語落語家へのインタビューを聞いて，必要な情報を聞き取る。（理解） 自分の部屋の様子について，there is (are)～構文を使って伝え合う。（表現） 	<ul style="list-style-type: none"> リスニング活動を円滑に行うために，内容についての表現をあらかじめ確認する。 活動に意欲をもたせるために，自分の部屋の物や特徴を there is (are)～構文を用いて説明する。 	2

Presentation 2（4時間）

主な学習活動	指導の手立て	時数
<ul style="list-style-type: none"> 町紹介のモデル文に触れ，町紹介をするた 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の町について発表を行うことで，there 	1

めの表現や構成を理解する。(理解)	is (are)～構文や既習事項を確認する。	
・紹介をしたい市町村と、その内容を考える。 (知識) (表現)	・グループ内で伝える内容を考えることで、文化や歴史などについて多くの情報の共有を促す。	1
・町紹介の動画を視聴し、全体で共有する。 (表現) ・秋田県の発展のために、よりよい町づくりの提案を行う。(表現)	・市町村についての情報を共有することで、秋田県についての関心の向上につなげる。 ・市町村についての情報や現状を判断して、よりよい提案に結びつけられるよう助言する。	1 本時 3/4
・前時の確認をする。 ・留学生に出身国の町の紹介をしてもらい、内容を理解する。(理解)	・紹介の概要を確認できるよう、視覚教材(パワーポイント資料等)を活用する。	1

4 授業の実際

過程	学習活動 ■教師の発問等	教師の手立て ○見取った生徒の姿
問いの練り上げ・課題設定	<p>1 前時に作成した秋田の紹介動画に対する留学生のコメントを聞く。</p> <p>■ Last time, we made video clips to introduce Akita. Let's watch them and think about "What are the good points in Akita?"</p> <p>■ Our ALT, Andy, watched the clips, too, and he pointed some weak points in Akita. Listen to his comment and share what he is saying.</p> <p>■ I also got comments from students in Akita University. And they are from other countries. They say good points and bad points. Watch the next clips.</p> 	<p>秋田県のよさを考えられるよう、前時で生徒が作成した紹介動画を提示する</p> <p>○「秋田県のよさは自然にあふれていることである」</p> <p>○「竿灯などの祭が秋田県のよさである」</p> <p>ALTが考える、秋田県が改善すべき点を聞き取る。</p> <p>○「秋田県は都心から遠く、新幹線で4時間もかかる」</p> <p>秋田大学に通う留学生のコメントを聞き、彼女らの目線での秋田県のよさや改善すべき点を聞き取らせた後、Jamboardで要約する。</p> <p>○コメントから秋田県についてのよさや改善点を聞き取っている。</p>

	<p>2 本時の課題を確認する。</p> <p>■ Today's goal is to be able to talk about "What can we do for Akita?"</p>	<p>学習班9グループに対して対象を限定した上で「秋田県のために何ができるか」について考えを深めるよう促す。</p>
<p>課題追求・問い直し</p>	<p>3 秋田県の発展のために、よりよい町づくりの提案を行う。</p> <p>■ Think of the question. Write down your idea on the worksheet.</p>  <p>■ Look at the right side of the worksheet. Repeat after me.</p> <p>■ Let's have MIERU Talk in 10 minutes. MISERU-SAN types your members' ideas. NANDE-SAN will have questions about each of them.</p> <p>■ Look at the screen. Some groups focus on a problem, and usually money is a big problem when you try to solve them. Now we know a famous person from Akita, Yoshihide Suga. Try this idea: If you have a chance to talk with Yoshihide Suga, the Prime Minister of Japan, what do you want him to do for Akita?</p>	<p>個々の考えを書き出せるように、ワークシートを準備する。</p> <p>○話し合いをするために自身の考えを書き出している。</p> <p>話し合いを進めるために必要な表現を確認する。</p> <p>○話し合いに必要な表現を一覧をもとに確認している。</p> <p>よりよい町づくりの提案ができるよう、ミエルトークを用いる。</p> <p>○Jamboard 上でミエルトークをすることにより、思考の可視化をしながら考えを深めている。</p> <p>「首相にどのようなことを要望すると有効か」を話し合えるよう、If you have ~for Akita?の分を提示する。</p> <p>○これまで進めてきた話し合いの内容をもとに、どのような要望が班の意見としてふさわしいか話し合いを重ねている。</p>

	<p>4 グループで出た意見を全体で共有し、質疑応答・コメントを出し合う。</p> <p>■I would like some of you to give your ideas to the class.</p> 	<p>みんなの考えを共有するために、グループで出た意見を発表する。</p> <p>○「外国人には温泉が好きながいるので、温泉が必要だと考える。温泉施設の建設には時間と費用がかかるのが問題点である。」</p> <p>○「(上記の意見に対して) 私も温泉にはまあまあ訪れるので、よい考えだと思う。」</p> <p>○「(高齢者には) ユニバーサルデザインは見えても美しいし、必要だと思う。」</p> <p>○「(上記の意見に対して) どの場所にユニバーサルデザインがあるとよいと考えるか。」</p> <p>○「(上記の質問に対して) 階段をスロープにしたい。」</p>
振り 返り	<p>5 本時の振り返りをする。</p> <p>■Do you have any comments on today's class?</p>	<p>振り返りを共有する。</p> <p>○「多くのアイディアを聞くことができたのがよかった。」</p>
<p>《生徒の振り返りから》</p> <ul style="list-style-type: none"> 友人と話し合いを多く重ねることができた。 秋田県について深く考えることができた。これからも貢献していきたい。 多くの意見を聞くことができたのでよかった。 		

5 省察

本校での「開かれた個」は「他者や社会、自然、環境との関わりを通して、省みて考え、自分自身を深めつつ、集団生活の中で一定の役割を果たしながら生きていく生徒」と捉えている。この不確定な社会を生き抜くためには、私たちには、不安定な判断材料と自身の持ち合わせたスキルを組み合わせながら、他者と協力する場面が何度も訪れることが容易に想像されるのである。答えのない問題に対して、ある一定水準の満足の得られる解答を繰り出していくためには、批判的思考力を高めることと協働的課題（問題）解決学習を充実させることは大きな課題となってくるだろう。

これを実現するために、ミエルトークの推進と問い直しの場面を取り入れた協働的課題（問題）解決学習のプロセスを授業のひとつのスタイルとしているが、ミエルトークについては、本科でも有効であると実感している。ただし、日本語では容易に議論ができていくかもしれない内容を外国語で行わなければならない点で、他教科よりも議論自体についてのハードルが高くなっており、生徒個人が持ち合わせている表現についての知識（単語・文法）や発話に向けて組み合わせる即興力は様々である。相手に自分の考えを伝えるのに一苦労する生徒もいれば、相手の考えをくみ取るのに時間がかかる生徒もいるために、他教科よりも個を磨き、相手に配慮を要する場面が多いと感じる。

これに加えて、本時ではICTを活用した授業として、各生徒がタブレットパソコンを1台ずつ使用した授業の提案を試みた。これにより、生徒はミエルトークをする場面において、持ち合わせた知識をもとに思考の可視化を求められると同時に、母語ではない言語（英語）を使用すること、さらにはICT活用をすることも求められることとなった。上記の3点全てに精通する生徒は少なく、ほとんどの生徒が何かしら不安要素を抱えた状態で協働的課題（問題）解決学習に取り組んだことになる。このような経験を繰り返すことで、生徒は「開かれた個」と呼ぶにふさわしい人間に成長していくのではないだろうか。

本科の本年度の重点は（1）多面的・多角的な視点に気付く課題設定の工夫、（2）確かな表現力を育成する手立ての工夫、である。（1）については、本時の3でミエルトークを進めていく際に、学習班9グループに対して視点を3種類のうち1つについて考えるように促した。これにより、ミエルトークの際に3人の班員から自分とは異なる考えを共有することになることに加えて、本時の4で全体共有をする際に、他の班の発表の内容が自分の班のものとは異なる可能性が高まることを想定した。結果として、「外国人向けには温泉が必要ではないか。」「高齢者向けにはユニバーサルデザインが必要ではないか」といった異なった考えや価値観を生徒は共有することができた。（2）については、英語で活動を進めていく上での必要な表現をリストアップし、補助資料として生徒が活用した。単語の意味を知っていても、それを組み合わせて相手に伝えるには、相手に伝える表現集はあった方がよいと考える。表現集を習得させるには単発の授業では効果が薄いことから、帯活動を利用したりして継続的な活動を心がけたい。

本時における批判的思考力を磨き合う場面においては、（1）については、ミエルトークの中で役割を決め、それに沿って相手と考えを伝え合ったことが班としての意見の構築につながったと考える。（2）については、家庭でスマートフォンやパソコンに触れている生徒も多くいることから、授業への導入に大きなトラブルはなかった。Edmodoは掲示板や課題配付・回収などの機能を持つWEBサービスであり、本時では、課題の指示とJamboardへのURLの提示に使用した。本時以外の活用を想定するならば、小テストの配付と即時採点、英作文の課題提示と修正、動画の投稿と評価などがあるだろう。また、JamboardはホワイトボードのWEBサービスであり、同時に複数人が入力することができる。また、フレームの機能に着目すると、フレームを自由に追加できることから、それぞれのフレームを学習班に割り当てることで、ひとつのURLで複数のホワイトボードを共有できることになる。これにより、各学習班は自分のフレーム（ホワイトボード）に着目して活動を進めていくことが可能であり、また、自分の班の意見が停滞してしまっても、他の班に割り当たっているフレーム（ホワイトボード）を自由に閲覧して参考にすることができる。上記の2つのWEBサービスはオンラインで利用できるものであるために、生徒が学校と自宅で離れていても授業が成立するであろう。

今年度はオンラインでの授業に取り組んだが、まずは生徒と教師、または生徒と学校とのつながりを意識した。ほぼ全ての生徒が自分の力で自宅からコンピュータを使用して授業に参加した。また、ビデオ会議システムであるZOOMを使用した双方向のやりとりに十分に慣れ親しみ、対面授業ほどではないがリアルタイムに一斉授業やグループでの話し合い活動に取り組むことができた。まだ遠隔授業では行っていないものの、EdmodoやJamboardなどのWEBサービスを利用して、お互いの考えを共有し、練り合う下地を作ることもできた。今後は、どのようなWEBサービスや授業方法が有効であるかを精査し、遠隔授業でも対面授業でも手法が大きく異なることなく進めていくことができるような授業形式・内容を提案していきたい。

ー本実践から見えてくることー

ICT機器を活用した「ミエルトーク」の取り組み

共同研究者：若原 保彦
(秋田大学教育文化学部 英語・理数教育講座)

1. 本実践の活動とその意義について

2年生を対象とした今年度の公開授業は、英語落語をテーマに取り上げた *New Horizon English Course* の Rakugo in English (Unit 6) 及びその直後にある「町紹介」(Presentation 2) が基になっている。留学生と互いの町を紹介し合うことを単元の最終目標に設定し、本時では秋田のまちづくりを考える活動を行った。具体的な手順は以下の通りである：(1) 生徒が作成した秋田の紹介動画に対する留学生のコメントを聞き、本時の課題を確認、(2) 秋田をよりよいまちにするための提案をグループに分かれて Jamboard を用いて考える、(3) グループで出た意見を全体で共有し、質疑応答・コメントを出し合う。

上の活動は、新学習指導要領の「話すこと [やりとり]」に関する「社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする」という目標を意識した取り組みと位置づけられる。また県教育委員会の『令和2年度学校教育の指針』にある「教科書等の題材を生かして、自分の考えや気持ちなどを伝え合う即興性を意識した言語活動の工夫」という文言をふまえた活動でもある。なお Jamboard の活用は前述の学習指導要領にある「生徒が身に付けるべき資質・能力や生徒の実態、教材の内容などに応じて、視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用し、生徒の興味、関心をより高め、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること」を意識したものとなっている。

2. 本実践で行った工夫と成果

本実践で行った工夫の一つは、生徒が題材への関心を高めた状態で話し合いができるよう、ALT や留学生のコメントを紹介したことである。自分たちが考える秋田の良さだけでなく、ALT や留学生など外国人の目から見た秋田の良さや課題に関する情報を提示することで、多角的な視点から考える姿勢を引き出すことにつながった。また、グループに分かれて実施した「ミエルトーク」は Jamboard を活用して行われたが、そのことで生徒は教壇の隣に設置されたスクリーンを通して他のグループの議論の進行状況を確認できるようになった。これは自分たちが今何をやる時間なのかを確認する際、教師の机間巡視を待ったり、他のグループの活動を邪魔することがないという意味でも効果的であった。

その他、「ミエルトーク」で用いた付箋は、流暢に英語が話せない生徒でも自身の考えの要点を伝えることができる点で生徒の助けになっていた。さらに、スペースの限られる付箋では要点しか示されないことで、そこから詳細を尋ねる即興の要素を含んだ質疑応答を生み出しやすくする効果もあった。

3. 本実践の課題と解決策

全般的には新指導要領を意識した提案性の高い授業と言えるが、本実践では次の課題が残された：(1) ICT 機器をスムーズに操作しながら授業を行っていたが、time management を優先した結果、やや教師主導の授業になった面がある、(2) 題材に関する理解を深めることができた一方で、付箋の英語のつづりや文法の間違いへの対応など、言語面の改善を図る時間が十分に確保できなかった、(3) ICT の活用の負の影響として、目の前に相手がいるのに顔よりも画面を見て話したり、Jamboard の画面上に貼る付箋の位置や色にこだわったり、付箋に文字を詰め込もうとする生徒がいた。今後こういった課題への対策を考えた授業運営が求められる。

道徳

社会とつながり、よりよく生きるための 道徳性を育む指導

—積極的に他者と関わり合い、広い視野から考え、
新たな価値を創造する力を育てる授業づくり—



I 研究テーマについて

これまでの研究実践では、生徒の様々な意見が生じる場面において、生徒の「共感」（他者の考えを尊重し、関心をもって他者の感情上の情報を集めている状態：本校道徳部における定義）を促しながら互いの意見を交流させる協働的な活動を取り入れてきた。その中で、友達の意見と自分の意見を比較して考えたり、資料の中の登場人物と自分を重ね合わせたりして、道徳的価値に対する思いを深めていくことができた。特に、ミエルトークや意思表示カード（ババヘラカード）、ネームプレートの使用により思考を可視化することで、話し合いの中で生徒の考えが変容していく様子が見られた。

学習指導要領では「特別の教科 道徳」において、その目標を「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」としている。答えが一つではない道徳的な課題について、生徒たちは自分自身の問題と捉えて、多様な価値観に触れながら考え、向き合うことが求められている。

本校研究テーマ「共に未来を切り拓く 開かれた個～批判的思考力を磨く授業実践～」においても、予測困難な社会を切り拓いていくために、他者と関わり合いながら課題解決を目指す中で、多様な考えや新しい価値に触れることで自分自身の考えを磨いていくことを目指している。

道徳科でも本校の研究でも、学習者が多様な価値観に触れながら新たな価値を創造し、今まで体験したことのない社会の訪れの中でよりよく生きる人を育てることをねらいとしている。そこで道徳部の研究テーマを「社会とつながり、よりよく生きるための道徳性を育む指導」と設定した。また、道徳科の学習指導要領解説に「グローバル化が進展する中で、様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きることや、科学技術の発達や社会・経済の変化の中で、人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図ることが一層重要な課題となる。こうした課題に対応していくためには、人としての生き方や社会の在り方について、多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話し協働しながら、物事を広い視野から多面的・多角的に考察することが求められる」とある。「多面的」とは、主として一つの事柄を外側から見すえる発想、「多角的」とは、一つの事柄について、その原点に立ち、自分の考えの方向を明らかにする発想である（永田繁雄 東京学芸大学教授による）。新しい社会の中でよりよく生きるために、広い視野から多面的・多角的に考え、新たな価値を創造していくことは、道徳科で培う力として必要不可欠と考える。そこで、サブテーマを「積極的に他者と関わり合い、広い視野から考え、新たな価値を創造する力を育てる授業づくり」とした。

Ⅲ ■ 令和2年度の秋季授業研究の記録

－実践記録（第2学年）－

1 主題名

「相互理解，寛容」 内容項目 [B－(9)]

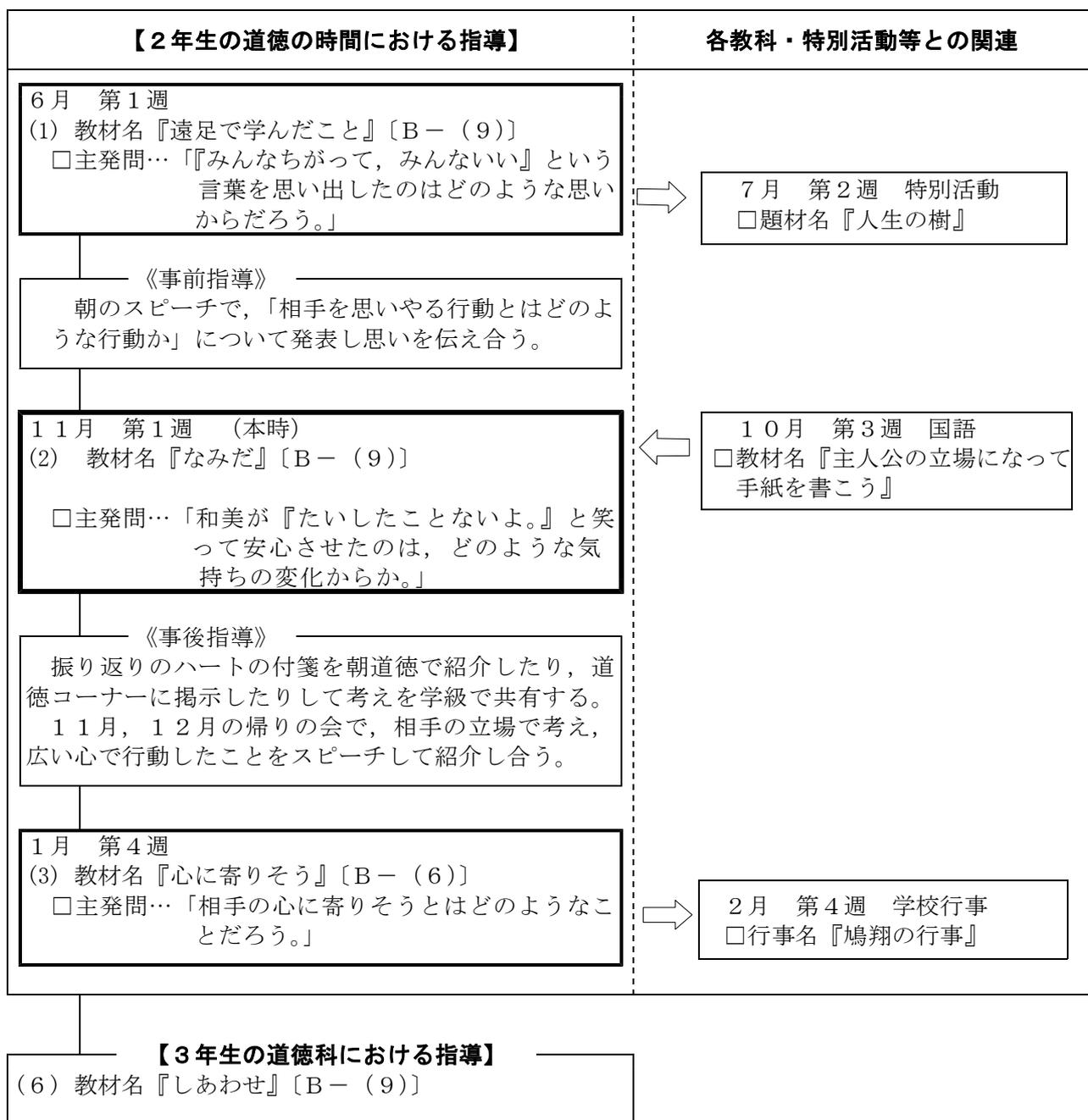
－生徒同士の関わりから，ねらいとする道徳的価値に迫る－

- (1) ねらい 相手の立場に立って考え，広い心で行動することの大切さや難しさを実感できる。
 (2) 教材名 「なみだ」

2 批判的思考力を磨き合う場面

- (1) 「充実した生き方をするためにはどのような決断をすればよいのか」という内容についてグループで話し合いを行った。自分と友達の考えを比較し，共感したり質問したりすることを通じて，充実した生き方に対する考えを深められるようにした。
 (2) 学級全体でも話し合うことで，より一層の深まりと広がりが見られるようにした。

3 全体計画



4 授業の実際

過程	学習活動 ■教師の発問等	教師の手立て ○見取った生徒の姿
問いの練り上げ	<p>1 今までどんな時に涙を流したことがあるかを考え、本時のねらいを方向付ける。</p> <p>■ 今までどんなときに涙が流れましたか？</p>  <p>2 資料を読んで自分が気になったところやみんなで考えてみたいところを発表する。</p> <p>■ 今日の資料は「なみだ」です。先ほど皆さんにも今まで流した涙について話してもらいましたが、このお話の涙はどんな涙なのでしょう。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">涙の種類は、自分のためにだけではなく他人のために流す涙もあることを押さえる。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">ババヘラカードで「相手の立場で考える」ことができているか表示を促す。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">気になったところや考えてみたいところに赤線を引くことと、特に気になったところや葛藤場面には二重線を引く事を確認する。</div> <p>○ 「あくびをしたとき」 ○ 「映画で感動したとき」 ○ 「おばあちゃんが亡くなったとき」 ○ 「ドラマでいじめの話聞いたとき」</p>
課題追求・問い直し	<p>3 みんなの前で元気に振る舞った和美の気持ちを考える。</p> <p>■ 話を読んでどこに線を引いたかグループで発表しましょう。</p> <p>■ 班で話し合っ、自分の考えに変化があった人はいますか。</p>	<p>○涙を信じなかった自分に腹立たしくなった ○不思議な感情がわいてきた ○あの涙は何だったのだろうか</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">グループで考えを深めるために「ミエルトーク」をするように指示する。「なんでさん」の役割の生徒には、発表者の考えの理由を掘り下げる質問をすることを確認しておく。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">和美の行動について考えるときは、単なる予想ではなく、文章や自分の経験などの根拠を持って発言することを確認する。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">和美の行動に対する個々の捉え方が様々であることを確認するため、自分の考えの理由を発表する全体の場を設ける。</div> <p>○ 「本当は許したくない」 ○ 「安心させたい。人に優しくしようと思った」 ○ 「S君のことは悪く思っていない」 ○ 「S君もS君のお母さんを安心させたい」 ○ 「クラスのことを大切にしたい」</p>

4 相手の立場で考えるとはどういうことなのかを考える。



■ 「相手の立場で考える」とはどういうことなのか、今までの自分を振り返りながら考えてみましょう。

■ 皆さんにも、和美さんのように行動の間違いに気づき、素直に認めて改めて価値のある行動に移したことがあると思います。自分の経験を根拠に考えを書いてみましょう。

導入を想起させながら、自分の経験で和美のように他人のために流した涙があるかを考え、自分にも道徳的なよさがあることに気付けるようにする。

自分の気持ちをハートの付箋に書くことで、自分のこれまでの行動を振り返ることができるようにする。

自分の経験を書けない生徒には、同じような場面ではどのようにしたいかを記述するように促し、価値に気付けるようにする。

- 「どうすれば良いのかを考えてから行動する」
- 「相手の気持ちを理解しようとする」
- 「心理的な距離を縮めようとする」

まとめ・振り返り

5 本時の話合いで印象に残った友達の言葉について考え、振り返る。



■ 今日の話合いで印象に残った友達の言葉について考え、振り返ってみましょう。

■ 振り返りカードに、今日考えたことや心に残った友達の言葉を書きましょう。

自分の考えに影響した友だちの発表と、その発表からどのようなことを考えたかを書くことで、関わり合いの中で自分の考えが変容したことに気付けるようにする。

ババヘラカードで「相手の立場で考える」ことができているか表示を促す。

- 「辛いのは自分だけでなく相手も辛い」
- 「最初は痛さから自分だけの考えだったが、みんなのことを考えようと思った。でも自分は痛さで我慢できないかもしれない。」



■ 授業の初めに話してもらった涙にも、人のために流した涙がありますね。皆さんの中にたくさんの良さが涙につながっていますね。

《生徒の振り返りから》

- ・ 相手の立場を考えるとというのは、簡単そうに見えて難しいことだと思った。何かあったときに自分を優先して考えてしまうのは誰にでもあり得るし、他の人の事まで考えられなくなる。出来事に対して周りはどう思っているのか、他の人のことも考えられるようになりたい。
- ・ 相手の態度次第という所はある。「S君は謝っていない」ということは重要である。正直、当事者同士の問題だからS君と主人公が良ければ一件落着するのではないか。
- ・ 相手の気持ちや思いを自分なりに感じ取って、相手にどうしたら安心してもらえるか、どうしたら笑ってもらえるかを考えることだと思う。相手の行動の意味をくみ取って相手のことを気遣うことが大切。
- ・ 自分のためだけでなく、友達や友達のお母さんを想って泣いてしまうように、自分が辛い状況でも相手の気持ちを理解しようとする事が大切だと思う。自分を中心に考えるのではなく、立場を変えてみるべき。
- ・ 相手の立場で考えるとは、相手の気持ちにならないと分からないことだと思う。相手の立場や気持ちについて考えるためには、相手と自分を照らし合わせて、もし自分が相手の立場であったらどんなことを考えているのかを理解することが大切だと思う。

5 省察

(1) 様々な価値を読み取れる教材を活用する上での、発問の工夫

本教材は、「寛容」に価値を置くことも可能な内容である。しかし、自分の考え方や立場に固執し、他者の意見に耳を傾けることが難しい様子や、他を顧みずに自己中心的な言動をとることも少なくない生徒の実態を踏まえ、「相互理解」という内容で授業を展開した。

授業では、「和美が『たいしたことないよ。』と笑って安心させたのは、どのような気持ちの変化からか。」という内容についてグループで話し合いを行った。自分と友達の考えを比較し、共感したり質問したりして、相手の立場に立つことの大切さや難しさについて考えを広げられるようにした。さらに学級全体でも話し合うことで、考えを深められるようにした。また、授業の始めには「ケガをさせた方が悪い」「相手が泣いても許したくない」などの意見がみられたものの、ケガをさせた側の立場についても考えたことで、「自分のことだけでなく、相手がどう感じるかを考えた行動は、思いが相手に届く」「自分がこの発言をしたら、相手はどのように受け取るのだろうか」と考えることが大切」など、多面的・多角的な考え方へ変容する姿が見られた。

振り返りには、主人公の考え方に共感しつつも「もし自分が相手の立場であったらどんなことを考えているのかを理解することが大切だと思う。」と書くなど、主人公の成長に自分の姿を重ねながら、自身の問題としても考える生徒が多数いた。また、授業の始めには「ケガをさせたS君のことを許せない」などの考えが強かったものの、自分のお母さんやS君のお母さんの行動についても考えさせたことで、「自分の気持ちも相手の気持ちも大切にしていきたい」「自分も相手も大切にすることで信頼しあえる関係になりたい」など、広い視点での考え方に変容する姿が見られた。

(2) 多様な価値観に触れる話し合いの指導の工夫

今までどのような涙を流したことがあるかを想起し、いろいろな涙があることを確認し合うことで、相手を慮る涙についての考えを深めることができるようにした。「みんなの前で元気に振る舞った和美の気持ち」について話し合った結果、自分の考えを自分の言葉で伝えようとする姿が見られた。また、一人一人がナンデさんの役割をする「道徳版ミエルトーク」の特質は、人任せにしない話し合いをする姿勢にもつながっていると感じた。同時に、ナンデさんの問い返しをホワイトボードに可視化する力も、実践を積み重ねるにつれて身に付いてきている。本時では、可視化された班員の考えに触れながら話し合いが展開された。多様な価値観に気付くための手段として、ミエルトークは有効であると実感している。

また、導入と振り返りの段階で「相手の立場を考える」ことができているかをババヘラカードで表示したり、友だちの発表からどのようなことを考えたかを書いたりすることで、関わり合いの中で自分の考えが変容したことに気付けるようにした。多様な価値観に触れながら討論を重ね、「こういう考えもあるのか。でも自分はこのように考える。」など、広い視野で物事を捉えられる場面を設けていくことが必要であると考えた。以上のことから、ミエルトークを教室全体に広げ、より多くの価値に触れていく授業を構築していくことを、次年度の課題としたい。また、ババヘラカード以外にも、心情円やネームプレートの使用、役割演技による心情の想起など、どのような手立てを講じることで、より深い話し合いをすることが可能になるかを、日々の授業の中で積極的に試していく一年としたい。

—本実践から見えてくること—

生徒同士の関わりを通して、ねらいとする 道徳的価値に迫る授業実践

共同研究者：小池 孝範

(秋田大学教育文化学部・こども発達・特別支援講座)

1 研究の重点と本授業実践のねらい

本年度（令和2年度）は、研究主題「共に未来を切り拓く 開かれた個」のもと進められてきた研究の3年次・最終年次にあたり、本年次の研究副主題は、「批判的思考力を磨く授業実践」となっている。こうした全校の主題をふまえ、道徳部では、「社会とつながり、よりよく生きるための道徳性を育む指導——積極的に他者と関わり合い、広い視野から考え、新たな価値を創造する授業づくり——」を今年度の研究テーマとした。

こうしたテーマのもと、本授業実践では、

（1）教材を活用し、多様な価値にふれる発問の工夫、（2）多様な価値観に触れる話し合い指導の工夫の二つを重点として実施された。以下では、この二点を中心に検討し、課題と今後の展望を提示したい。

2 「教材を活用し、多様な価値にふれる発問の工夫」について

本実践授業にあたって「構造的な視点に立つ教材分析」のあり方が模索された。事前検討では、本授業のねらいである「相手の立場に立って考え行動することの大切さに気付くことができる」ようにするため、「和美の気持ちの変化」が全体として考えられるような「中心発問」のあり方を中心に検討された。

実践授業では、この問いについて、個人で考えた内容を、グループ、学級と共有していく中で、和美の立場だけでなく、ケガをさせたS君、クラスの仲間、和美の母の立場等、多様な観点に立った意見が出され、登場人物に「共感」し、「相互理解」が展開

される様子が看取された。むしろ、こうした話し合いが展開できたのは、生徒同士の「相互理解」が前提となっていたからである。生徒同士の相互理解が可能となったのは、次に触れる「話し合い指導の工夫」が機能していたからであろう。

3 「多様な価値観に触れる話し合い指導の工夫」について

本授業実践では、「多様な価値観に触れる話し合い」となるよう、「ミエルトーク」を中心に、道徳科で取り組んできた「ババヘラカード」「付箋」の活用等、生徒の考えの「可視化」に重点をおいていた。

「付箋」は自分の考えを示すだけでなく、「ミエルトーク」において「他者の考え」に触れる端緒としても、「ババヘラカード」は話し合いを通じての考えの変化を可視化するものとして機能していた。

また、今回の工夫の中心である「ミエルトーク」では、司会進行の「ミセルさん」と、その補佐役としての「アシスタント」、また、道徳科で約10年活用してきた、考えの根拠を掘り下げる役割の「ナンデさん」のそれぞれが、その役割を理解し、グループでの話し合いの中で、自分の意見を「発信」するだけでなく、相手の話を聞き、さらに聞き出していく役割を果たしていた。これは、普段の授業での取組みがうかがわれるものであり、「考え、議論する道徳」として展開するうえで有効であったといえるだろう。

4 課題と今後の展望

以上のように、本実践授業での取組みは、ねらいとする道徳的価値に生徒同士の関わりを通して迫るものとなっていたと概括できるだろう。今後は、様々な「工夫」を、ねらいとする道徳的価値、クラスの状況等に応じて、適切な組み合わせを検討し、活用していくことが必要となってくるであろう。

特別活動

社会の中で自分の可能性を広げるために、
主体的に行動しようとする態度を育む指導

— 互いの考えを認め合い、
新たな価値を生み出す話し合いと実践 —



I 研究テーマについて

1 本校特活部として育てたい生徒像

社会の中で自分の可能性を広げるために、自らが所属する集団や社会に所属感や連帯感をもち、その生活の向上に向けて主体的に行動しようとする生徒

本校特活部では、「人生の樹」の取組を柱に、特別活動での学びを通して、将来なりたい職業の先にある「目指したい将来の生き方」に気付かせることを重視している。

学習指導要領の改訂に伴い、中学校特別活動において育成を目指す資質・能力の三つの視点が、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」となった。研究の柱である「批判的思考力」を伴った特別活動の学びを通して、生徒が異なる思いや考えをもつ仲間と尊重し合っこそ集団の向上が成し遂げられることを実感するとともに、職業を超えた「目指したい将来の生き方」に気づき、その実現に向けて、自分の可能性を広げるべく主体的に行動してほしいという願いを込めて、この生徒像を設定した。

2 研究テーマおよび研究サブテーマ

社会の中で自分の可能性を広げるために、主体的に行動しようとする態度を育む指導

- ・「社会の中で自分の可能性を広げる」…生徒が現在と将来の自分の姿を見据え、将来目指す生き方の実現と現在の集団生活の向上とを結び付けて捉えることで、自分のよさを生かして行動したり、主体的に問題を解決しようとしたりすること
- ・「主体的に行動しようとする態度を育む」…学校生活において、生徒が集団の向上のために必要なことを自ら考え、見通しをもって行動に移し、最後まで責任をもってやり遂げようとする主体的な活動を積み重ねるための支援をする。

3年次サブテーマ：－互いの考えを認め合い，新たな価値を生み出す話し合いと実践－



2年次サブテーマ：－互いのよさを生かし，よりよい集団生活を目指すための話し合いと実践－

1年次サブテーマ：－互いのよさを認め合い，新たな価値を見いだす話し合いと実践－

1年次研究では，個における新たな価値の発見に重点を置いて研究を進めた。「ミエルトーク」による話し合いを継続し，役割毎のスキルが意識化され，批判的思考力を高める手立てとして機能していることを実感できた。

2年次研究では，学校生活で自らが所属する集団やその生活の向上に向けて，切実感のある題材を設定し，ミエルトークによる話し合いを積み重ね，振り返りの充実を図ることができた。

そこで3年次研究では，「ミエルトーク」で出てきた結論ボードを用いて，板書構成を工夫し，学級全体で行う「ミエルトーク」の実践を積み重ねたい。傾聴を基盤として，グループごとの「ミエルトーク」の活性化を図りつつ，学級全体で新たな価値に気付くことができるようにすることもねらいとしている。

II 研究内容について

1 本年度の重点

- (1) 自己肯定感を高め，「目指したい将来の生き方」に迫るための「人生の樹」の活用
- (2) 傾聴を基盤とした，ミエルトークの活性化と，学級全体での意見交換の工夫

2 研究の方法

- (1) 自己肯定感を高め，「目指したい将来の生き方」に迫るための「人生の樹」の活用
 - ・「人生の樹」のポートフォリオに工夫を図り，自己理解，他者理解を促進させ，職業を超えた「目指したい将来の生き方」に迫ること。
- (2) 傾聴を基盤とした，ミエルトークの活性化と，学級全体での意見交換の工夫
 - ・傾聴の4つのステージを掲示し，それを目標とすることで，安定した人間関係を築き，「ミエルトーク」における意見交換を活性化させること。
 - ・「ミエルトーク」で出てきた結論ボードを用いて，板書構成を工夫し，学級全体で新たな価値に気付くことができるよう工夫すること。

Ⅲ 令和2年度の実践記録（秋季授業研究）

－授業記録（第1学年）－

1 単元名（題材名・主題名）

「働くとは？」－ミエルトークを通して、働くことの意義に迫る－

2 批判的思考力を磨く場面

(1) 「人生の樹」の継続的活用

活動を通して得たものを「人生の樹」に新たに書き込むことができるようにし、自己理解を深められるようにする。

(2) 傾聴を基盤とした、ミエルトークの活性化と、学級全体での合意形成や意思決定の工夫

学級全体でミエルトークを行い、各グループから職場体験学習で得られるものについて意見を述べさせ、話し合いを行う場面。

3 全体計画（4時間）（「全体的な指導の構想」, 「本活動内容の指導計画」）

主 な 学 習 活 動	・指 導 の 手 立 て ◆ 批判的思考力が磨かれていると捉えた生徒の姿	時数
<ul style="list-style-type: none"> ・ミエルトークを行い、職場体験学習で得られるものについて意見を出し合い、お互いの考えを共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職場体験学習で得られるものについて、可視化して考えられるようミエルトークでの話し合いを用いて、グループの中で意見を共有する場を設定する。 ◆ 「総合DOVEの時間で考えた働くことの意義について実際の場面で確かめられるのではないか」 	1
<ul style="list-style-type: none"> ・学級全体でミエルトークを行い、職場体験学習で得られるものは何かについて意見交換を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで話し合った考えを学級全体で問い直し、意見を整理できるよう、学級全体でミエルトークをする場面を設定する。 ◆ 「職場体験をすることで、自分たち目線だけではなく、様々な視点からその職業を見ることができるといった意見が自分たちの班の考えとつながると思いました」 	本時 2/4
<ul style="list-style-type: none"> ・体験先での望ましい振る舞い方や現状を踏まえた気配りについて、意見交換を通して考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体験先での望ましい振る舞い方や、現状を踏まえた気配りについて考えが広げられるよう、意見交換を行う場面を設定する。 ◆ 「あいさつは大きな声ではきはきと言えてい 	1

	<p>ましたが、表情などの細かい部分では気を付けていなかったのが、職場体験学習では相手を意識してあいさつができるようにしたいです」</p>	
<p>・職場体験学習のまとめを行い、それぞれが学んできたことを共有する。</p>	<p>・職場体験学習で得られたことを共有する場面を設定し、お互いの考えを認め合えるようにする。</p> <p>◆「どの仕事も誰かを支えていることに気付きました。あまり目立たない仕事でも、自分からできる人になることが大切だと思います」</p> <p>◆「職場体験学習を通して、生活する上でのヒントを得られました。自分の欠点である後先を考えずに行動してしまうという所も、ヒントを思い出し自分を変えていきたいと思いました」</p>	1

4 授業の実際

過程	学習活動 ■教師の発問等	教師の手立て ○見取った生徒の姿
問 い の 練 り 上 げ ・ 課 題	<p>1 前時に出た各グループの意見を結論ボードで確認する。</p> <p>■ 前回はどのような話し合いをしましたか</p> <p>2 各グループの意見を比較しながら、今日のテーマを設定する。</p> <p>■ 今日は各グループから出された結論をもとに、学級全体でミエルトークを行います。各グループから出された意見を整理・統合しながらテーマに迫っていきたいと思います</p>	<p>前時に、各グループごとに話合った結論ボードを掲示し、前時までの話し合い活動を確認できるようにする。</p> <p>○「職場体験学習で得られるものが何であるかについてグループで話し合いました」</p> <p>他のグループが考えた意見の一覧を掲示し、意見を比較できるようにする。</p> <p>○ 全体ミエルトークの進め方や役割分担を確認している。</p> <p>○「前時の授業では、聞き方がよかったですと言われました。今日も傾聴を大事に話し合いを進め</p>

設定

ましょう」

- 聴き方を意識して話合いに臨みたい。

課題追究

3 学級全体でミエルトークを行い、各グループから出された考えを整理する。

アシスタントは同じ意見であっても根拠を引き出し、話合いを深められるようにする。また、話合いの本筋からそれた時は軌道修正する。

■各グループから主張をお願いします

- 前時に各グループから出された結論を聞いている。

■主張に対して質問はありますか

- 各グループから出た考えについて根拠を受け止め、その根拠を更に問い直している。

■質問に加えて、似ていると思うものについても発言してください

- 「仕事の大切さを知って大人になるということについて。仕事の大変さは大人にならないと分からないことだが、働く側を経験することができれば、大人に近づけるのではないかと考えた」



- 「生き方や将来に生かせるという考えは、得られたものによって視点や生き方を変え、これからの目標を立てられるという考えに似ていると思います」

- 「立場を変えて見る仕事の表側と裏側は、お客さん側と店側では思いや願いが違うのではないのでしょうか。だから自分たちも店側の立場になった場合に、分かることがあるのではないと思いました」

- 「デメリットを知るということは、仕事のいい面だけではなく、仕事の現実を知ることができるということですね」

■得られるものを3つくらいに絞りたいので、この意見はつながるというものをグループで話し合ってください

- 「仕事の現状を知ることと、仕事のメリットデメリットを知るとは似ていると思います」

- 「目立たない仕事と仕事の見えない部分、裏側を知ることというのは似ていると思います」

- 得られるもの、1つ目は働く人の思いややりがい。2つ目は働くことについて知ることができるとなりました。3つ目がまとまっていません。話し合いをして意見を出してください。



- みなさんから出された意見をまとめます。1つ目は働く人の思いややりがいです。新しい視点があるかという意見も、この中に含まれるかと思えます。2つ目は働くことについてとなりました。3つ目は経験で、コミュニケーションも経験することによってうまれるので、経験に含みたいと思えます

問

- 4 職場体験学習で得られるものは、自分たちにとってどんな価値があるかについて話し合う。

- 3つの得られるものによって、どう変われるのでしょうか。これは職場体験の個人目標や質問にもつながる部分です

い

し

各グループから出された考えを整理・統合することにより、考えの共通点や相違点に気づき、人との関わりや働く人の思い、その職業についてなど複数の視点で捉えられるようにする。

- 「人との接し方や関わり方はどの職業にも共通すると思います」
- 「働く人の思いややりがい、働くことについては、聞けば分かることだと思います。経験は自分が実際にすることだから新たに得られるものだと思います」
- 「表から見る仕事しか分からないけれど、実際に行ってみることで裏側の仕事分かり、新たな視点を得られるのでは」
- 合意形成された意見に賛同し、今後の活動への意欲が高まっている。
- 「経験することで自分のレベルアップにつながり、将来の見通しをもてるのでは」
- 「働く人の思いを知ることで、日常で感謝の気持ちを伝えられるのではないかと」
- 「コロナの影響を受けた店の現状を知り、自分たちにできることを考えると思う」
- 「日々の生活を変えたり見直したりすることができるのではないかと思います。働くことを体験して本当の感謝の気持ちを込めたありがとうを言うことができると思います」

<ul style="list-style-type: none"> ■ 先生から資料を紹介してもらいます ■ 紙面の短い文章からも働く人の思いを感じられるのではないのでしょうか。実際に行くことでより思いに触れることができると思います 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>働く人の思いが感じられるよう職業インタビューの資料を準備する。</p> </div> <p>○ 紙面に目を向け、働く人の思いに触れている。</p>
<p style="text-align: center;">5 本時を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 振り返りを発表してもらいます <p>まとめ・振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 先生からお願いします ■ 聴き方がとてもよかったです。それが積極的な発言につながったのではないかと思います。次の時間にも生かしていきましょう。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>振り返りシートに、本時におけるN.E.Sの指標を示し、自分の言葉でまとめられるようにする。</p> </div> <p>○学習から感じたことを振り返りシートに自分の言葉でまとめている。</p> <p>○「職場体験学習で得られるものは、働くことについてだけだと思っていましたが、それ以外にもあることが分かりました。実際に行く時は、働く人の思いやその裏側に注目して本当に働くという意味を知りたいと思います」</p>
<p>《生徒の振り返りから》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・疑問やつながりを考えながら「職場体験学習で得られるもの」について考えられた。また得られたことからどんな影響があるかについても班でのミエルトークや全体のミエルトークを関連付けて自分の意見をもてた。職場体験学習では今回の話合いをもとに、質問・体験をしたい。その仕事に関して知らなかったことをしっかり見聞きして、将来はもちろん、これからの生活に生かせるようにしたい。 ・主張タイムでは、周りの意見と自分たちの意見、班内で出し合った意見を比べながら聞くことができた。また、質疑応答では、出された質問に分かりやすく答えようと努めることができた。1回目と違い、様々な意見を見比べながらだったので頭の整理がつかなくなる時もあったが、ミセルサンの黒板を見ながら答えを導き出せた。職場体験学習では今日の話合いをもとに、学びを深めたい。 ・今日の学級全体でのミエルトークでは、職場体験で得られることについて深く考えられました。班で話した時のミエルトークでは、職場体験に行き、得られるものを得られて終わりという考え方だったが、今日学級で話合いをしてみて、今後の将来につながっていくという考えに変わ 	

りました。実際に職場体験に行く時は、自分の将来のことを考えながらやりたいと思いました。

- ・今日は全体でのミエルトークだったので、積極的に意見を発表することができました。自分たちが行く職場体験なので、行った時にたくさんの情報を得て帰ってこれるように真剣に発表したり傾聴したりしました。職場体験学習は将来に必ず生かせることが多いと思うので、早く行ってみたいなと思いました。

5 省察

(1) 「人生の樹」の継続的活用

人生の樹は自分のルーツを投影するものである。職場体験学習を通して得たものを新たに描き込むことにより、自己理解の深まりにつながった。「なりたい自分」の発見と描き込みを継続することによって職業観を超えた「将来目指したい生き方」について視野を広げられた。授業の際に触れることがなかったので題材全体を通して、「人生の樹」とのつながりを意識させる仕掛けを再考したい。

(2) 全体ミエルトークによる話合い

学級全体ミエルトークでは、アシスタント、ミセルサンのコーディネート力が大きく影響した。「ミセルサン」が議論を板書することのみの役割になってしまったが、アシスタントと役割の連携を図ることで、発言がつながり、より話合いが深まるものとする。通常ミエルトークでは、ホワイトボード上で意見をつなげたり広げたりしていたが、黒板上では難しかった。話合いの流れの可視化という点では不十分であった。ホワイトボードを思考のツールとして効果的に活用していく上では、授業の中で各グループのホワイトボードに加筆していくことも可能なのではないかと考える。また、後ろの座席の生徒に文字が見えにくいという問題が生じたこともあり、今後はロイロノートのようなICT活用も検討していきたい。ミエルトークのスキルアップとともに、結論ボードの書き方の決まりを徹底することや掲示の仕方を工夫する必要がある。

(3) 傾聴の果たした役割

本時では、傾聴を基盤とした話合いを意識させた。全体の話合いでは、自分の気持ちや考えをまっすぐに表現し、発言を広げたり本質に迫ったりすることができていた。授業後半から終盤にかけての全体ミエルトークでは、生徒たちの「解決したい課題がある」「そこにたどり着きたい」という思いや「他の人の話を聴いて取り入れたい」「全体で話していることに意義がある」と感じることで傾聴を引き出していた。このような場面から、批判的思考力が磨かれている様子を捉えることができた。得られるものを3つに絞り込む過程で、3つ目をまとめようとする場面では、相手の意見を尊重したり全体のつながりを考えてまとめたりする姿が見られた。

(4) NES評価

本時では、「N:職場体験学習への興味・関心の高まり、ミエルトークの進め方」「E:新しい自分の発見、他者のいいところへの気付き」「S:自分の力を発揮できた」の3つの情意面から振り返りを行った。活発な話合いができたため自己効力感、自己有用感を感じながら授業を振り返ることができた生徒がほとんどであった。Nを選択した生徒の中には、ミエルトークの内容について言及するものやミエルトークから自分の将来につながることを考えられたという記述見られた。授業実践を重ね、授業効果の実感や改善の手がかりとしていきたい。

一本実践から見えてくること

学級での話し合い活動にミエルトークをもち込みながら、自分のキャリアの意味をみんなの議論の中から発掘する（中1三浦学級の試み）

共同研究者：

（秋田大学教育文化学部・地域社会・心理実践講座）森 和彦

1 「そこで自分は何を見つけるのか？」という問いの陰にあるもの

「君は毎日この教室にやってくるが、玄関からこの教室まで最短で何段の階段を上る必要があるか？」この問いに答えるためには、階段を上ってこの教室まで来る行為の繰り返しかけだけでは答えられない。上る階段の数を数えるという目的に基づいた活動が改めて要求される。「目的を見つけるのが目的」や「自分が知りたいことを探す」には、目標(target)がある程度具体化していることが必要で、抽象的な目標は目標ではなく、「何もなかった」につながりかねない。「学びたいことは何か？」は実践前の問いではなく、異なる次元の目標を持って実践経験した後に、「学びたいことが何か明確に分かった」場合、その経験に対して名付ける「問いの名前」に過ぎず、その答えがすでにできている場合に使う。新しい知識は古い知識の体系に加えられたり、置き換わったりして初めて獲得されるので、必要な基礎的知識（概念枠組みを含む）や技術がなければ、新しい感覚的情動的体験はあっても、そのままでは新しい知識の発見も技術の獲得もない。職場体験活動もtargetがあやふやでは、職場体験学習にはならないことの方が多い。そのために、「とりあえず体験してきてください」では、良い授業にはなり得ないので、ここに授業実践の工夫が入る。特に職場体験活動は生徒に誤解されやすい活動で、このような工夫は重要であろう。

2 先行オーガナイザーとしての「人生の樹」

の活用

さらに「人生の樹」プロジェクトを前もって実行しておくことは、「関心興味がある職場に行くためのアピールの場」でも「職業選択の入り口の話」でも「労働観の獲得」でも「楽しいか/そうでないか」でもない、本授業実践のミエルトークでの話し合いの目標に繋げるための、決定的ではないが重要なアイテムとなる。どのように効果的に繋げるかは、もう一工夫必要かもしれない。その意味では「人生の樹」が単なる自分の人生の工程表ではないという視点が欠かせない。

3 ミエルトークの本質と技術革新

これに発見学習が組み込まれたミエルトークの提案が本実践で行われている。ミエルトークの本質は1) 小集団討議学習に、2) 思考や意見の「見える可」と3) 役割の明確化と相補性が基本構造なので、学級規模で行うには特に2)の部分で工夫が欠かせない。ここではICT技術設備による支援がとても有効であろう。ただしロイロノートをはじめとするシンキングツールの教材開発は重要かもしれないが、教材費がなくてもできる工夫は昔から行われてきた。問題は教育現場で開発された技術・工夫の積み重ねが思っている以上に遅かったということである。実はこの積み重ねの加速化も現在の情報コミュニケーションツールによってなされてきている。

4 ミエルトークで運用される傾聴の本質

傾聴の本質は相手を尊重することによって、相手に受容感・承認感を抱いてもらうことにある。単に丁寧に相手の話を聞いて分析し、自分の中に取り入れることではない。聞き手のポジティブイメージが活用されてこそコミュニケーションに信頼関係が築かれて、正しい意図の読み取りが可能になり、前向きな気持ちで協働による問題解決の気づきが深まる。それゆえの運用である事を忘れてはならない。本授業実践の結果はこの作用の結果でもあることは明記すべきだろう。

総合的な学習の時間

自己と向き合い、社会と向き合い、対話を通して 自分の生き方を見いだそうとする学びの推進 －双方向の関わりから理想の生き方を問い直す－

I 研究テーマについて

本校における総合的な学習の時間（総合DOVE）は、本校の象徴である「鳩（＝DOVE）」から、『Developers enjoy studying voluntarily with originality.～独創性（創意）をもって、自発的に学習を満喫する、21世紀にはばたく生徒たち』という願いを込めて推進する、キャリア教育を中心とした3年間を通じた進路探究型の学びである。研究テーマは、探究的な見方・考え方を働かせ、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成するという総合的な学習の目標に、本校の研究の柱である「批判的思考力の育成」の実現を目指すことを踏まえて設定した。

2年次研究では、総合DOVEの集大成の場である「DOVE ACADEMY」において、1年生の「働くこととは」のグループ発表、3年生のグループ研究発表のいずれも、双方向のやり取りを取り入れ、学年を超えた意見交換を行った。また、その後の全校ディスカッションに向けて、事前に各学級や研究コース、縦割りグループでの話し合いと段階を踏み、いずれの段階でも「ミエルトーク」を活用して意見を深めたことを生かし、それぞれが学年での学びを踏まえてテーマに対する自分の見解をまとめることができた。課題としては、総合DOVEが生き方の追究という探究的な活動である大前提と、全体研究のゴールとしてのDOVE ACADEMYの充実との両輪で、生徒が独創性（創意）をもって自発的に探究し、他者とのかかわりを通して共に成長していることを実感でき、自分の理想の生き方を問い直したいという思いを高めるよう支援することが挙げられる。理想の生き方を問い直すとは、異質な他者の考えを肯定的に受け止めたり、批判的な思考をもって自他の提案を主体的に捉え直し、それまで考えていた理想の生き方の根底にある部分を深く追究したり、新たな価値を見いだしたりすることである。理想の生き方を問い直すことは、将来のキャリアプランニング能力を高めることにつながる。

また、本校総合DOVEにおける「批判的思考力を高める学び」とは、各教科で身に付けた批判的思考力を働かせた探究活動の充実を土台に、テーマに沿って主体的に意見を交流することで、自分の理想の生き方を問い直す学びと捉えている。

II 研究仮説について

興味関心のある、または研究の対象となる企業や人物等を訪問したり、他者との協働的な学びや双方向での発表を行ったりすることは、職業選択を超えた「未来の理想の生き方」の問い直しを促すとともに、将来のキャリアプランニング能力の育成につながる。

本校の生徒の実態を後述の評価規準の4観点から考えてみると、「知的好奇心や向上心が高い」「知識は豊富で自分の意見をもっているが、それを簡潔に分かりやすく伝えることが苦手」「問題解決への強い欲求がある」「就きたい職業はあるが、職業を超えた生き方までは考えが及んでいない」といった傾向が見られる。そのため、3年間の研究では、職業を超えた「なりたい自分の姿、目指したい理想の生き方」を学年ごとに段階をおって探ることを柱として進めていく。3年間での探究的な学習で身に付けた能力が、多様化が進み予測困難な未来社会の中でも、批判的に物事を捉え、異質な仲間とも協働し、どんな場面をも切り開いていく力になると考えている。

II 研究の重点

1 各学年の学習活動

- (1) 1年
『働くことの意義について考え、将来なりたい自分の姿を幅広くイメージする』
- (2) 2年
『専門職の方々の生き方に触れることで、目指したい理想の生き方を考える』
- (3) 3年
『目指したい理想の生き方に関する研究と実践化を行い、自己の理想の生き方を問い直す』

2 指導の手立て

(1) 1年部

職場訪問・体験学習を中心に、家族や身近な人から働くことの喜びや厳しさを実感させてもらうことにより、「働く意義」について考え、将来「なりたい自分の姿」のイメージを膨らませる。

<概要>

月	4	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
内容	ガイダンス (1)	ガイダンス (2)	自己理解 インタビュー計画 (4)	報告会・ 発表準備 (19)	Dove Academy (12)	訪問計画 (10)	職場体験 まとめ (6)	鳩翔の行事 準備・本番 (12)	次年度の 計画 (6)		

<内容>

月	活 動	時数	具体的内容
4	○全校ガイダンス	1	・総合学習のねらい、学年のつながり
7	○学年ガイダンス ○自己理解 ○働く意義 ○職場体験先の検討	2 2 2	・第1学年の1年間の流れを確認する ・自分調べを通して、自己理解につなげる ・働く意義について考える
8	○職場体験報告会	2	・事前調査
9	○DOVE ACADEMYに向けての発表原稿作成と	16	・発表グループ決定
10	全校ディスカッションに向けた学級討議		・発表プログラム、シナリオの作成
DOVE ACADEMY (12)			
	○DOVE ACADEMY振り返り ○職場体験について ・オリエンテーション ・グループ編成	1 2	・訪問先におけるグループ決定 ・訪問先への依頼
11	○訪問計画作成、講話会 ○依頼状作成	8	・自主研修の日程表、質問事項を作成する ・各事業所毎に作成
12	職 場 体 験		
	○職場体験における自主研修のまとめ	6	・新聞またはレポート作成による研修のまとめ
1	○鳩翔の行事に向けた準備	4	・発表準備、練習
2	(資料・原稿作成) …「なりたい自分の姿」	4	
鳩翔の日 (2)			
3	○次年度の研究に向けて	6	・興味・関心のある内容の確認、 ・次年度の見通し
合 計		60	

学 習 対 象	学 習 事 項
① 自分らしさや自分の成長 (自己, 級友, 保護者, 家族) (夢の変遷など)	1) 自分のよさや特徴について理解する。 2) 自分らしさに対する自信を深める。
② 保護者や家族, 親類の仕事 (インタビュー, 訪問活動)	1) 保護者や家族, 身近な人々を多面的・多角的に理解する。 2) 保護者や家族, 身近な人々への尊敬の念を深める。 3) 保護者や家族の努力や苦勞のうえに生きている自分の存在を理解する。
③ 様々な仕事に携わる人々 (職場体験活動)	1) 体験を通して仕事の喜びを共感的に理解する。 2) 体験を通して仕事の苦勞, 悩みを共感的に理解する。 3) 仕事に就くまでの過程と努力, 苦勞を理解する。
④ 職場体験活動後の記録や考察	1) 自分が探究し, 明らかにした「働くこととは」の結論を整理し, 自分なりの考察を加えるとともに, 次年度に向けた研究計画を立案する。

(2) 2年部

学習旅行を含む職場訪問や職業人講話を通して、様々な専門職に携わっている人々の生き方に触れることで、職業を超えた「目指したい理想の生き方」について考えを深める。

<概要>

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
内容	ガイダンス等 (6)	研究見通し ・講話等 (9)	訪問計画 (6)	報告会・ ACADEMY準備 (19)	Dove ACADEMY (12)	訪問計画 (10)	学習旅行 まとめ (6)	鳩翔の行事 準備・本番 (10)	次年度 研究見通し (6)			

<内容>

月	活 動	時数	備 考
4	○全校ガイダンス ○学年ガイダンス ○自分の適性を知る	1 3 2	・総合学習のねらい、学年のつながり ・今後2年間の取り組みについて ・適性検査
5	○研究の見通し ○講話会等	1 4	・適性と興味関心の照合
6	○研究の見通し、学習計画作成 興味のある分野で活躍する人の調査等 ○講話会等	2 2	・事前調査・文献調査 ・鳩翔サポートセンターの活用
7	○夏休み中の訪問先検討	6	・事前調査・訪問計画作成
8	○夏休みの訪問についての報告会	2	・学級ごとでのレポート発表
9	○学習旅行での訪問活動に向けた準備	6	・教師による訪問先決定と依頼
10	○全校ディスカッションに向けた学級討議 ○DOVE ACADEMYでの役割分担と準備 (講話会含む)	1 9	・「おもてなし部隊」(参観者のおもてなし)の活動
DOVE ACADEMY (12)			
	○DOVE ACADEMY振り返り ○学習旅行について ・オリエンテーション・グループ編成	1 2	・グループ決定
11	○訪問計画作成	8	・自主研修の日程表作成 ・必要に応じて訪問に関する資料準備等
12	○学習旅行における自主研修のまとめ及び 「将来目指したい理想の生き方」の整理	6	・レポート作成による研修のまとめ (冬季休業中の課題)
1 2	○鳩翔の行事に向けた準備 (資料・原稿作成)	4 4	・発表準備、練習
鳩翔の日 (2)			
3	○次年度の研究及び実践活動に向けて ○次年度のDOVE ACADEMYのテーマ検討	6	・研究コース決定と研究内容に応じたグルーピング ・コースコンセプトの決定とACADEMYまでの見通し
合 計		70	

学 習 対 象	学 習 事 項
① 自分の進みたい道に就いている人々、「なりたい自分の姿」に近い生き方をしている人々	1) 自分の夢に近い生き方をしている人々の生き方や業績を調べることを通して、自分の課題をつかむ。 2) 自分の夢に近い生き方をしている人々が身に付けている資質・能を知り、「なりたい自分」に近づくための研究内容を絞り込む。 3) 職業人の方々のお話を聞き、自分が理想とする生き方を考える。
② 探究に必要な資料 (訪問活動、文献資料、体験活動等)	1) 探究に必要な情報を幅広く収集する。 2) 長期休業や休日を活用した訪問活動、学習旅行の職場訪問を通して、必要な資料を収集・整理・分析する。
③ 資料の分析結果や職場体験後の記録や考察	1) 「目指したい理想の生き方」をまとめる。 2) 「目指したい理想の生き方」をもとにした研究テーマを設定する。 3) 「目指したい理想の生き方」について、実践してみたい内容を明らかにし、実践活動に向けた活動計画を立案する。

(3) 3年部

「目指したい理想の生き方」に関する2年生での研究を踏まえて、第三者（他人、社会、企業等）に対し、将来に繋がる何らかの表現・提案をする形での実践活動を行う。そこで得られた評価をもとに研究の修正、再実践を行い、社会の一員としての資質・能力を磨きながら、3年間の研究を振り返り、理想の生き方を問い直し、高校での新たな理想の生き方の追究につなげていく。

<概要>

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
内容	ガイダンス (5)	研究計画 (5)	テーマ追究 (4)	訪問計画 (6)	発表準備 (18)	Dove ACADEMY (12)	振り返り ・レポート (14)	次年度へ 提言	追究活動			

<内容>

月	活 動	時数	備 考
4	○全校ガイダンス ○学年（コース）ガイダンス ○研究計画～ACADEMYまでの見通し	1 3 2	・総合学習のねらい、学年のつながり ・コースコンセプトの確定 ・グループ研究の内容決定 ・ACADEMYでの発表構想
5	○実践活動に向けた訪問計画 ○全校ディスカッションテーマ検討	5	・実践活動の内容決定 ・訪問計画作成
6	○実践活動に向けた追究 ○実践活動先のアポイントメント	4	・実践活動の前提となる先行研究調査や事前学習 ・研究概要の説明及び実践活動の依頼（アポ取り）
7	○夏休み中の訪問計画 ○実践活動、及び研究の修正 ○ACADEMYでの発表構想検討	6	・訪問、実践活動計画作成 ・夏休み中に実践活動及び評価、修正～再実践までを終える ・発表計画書作成
8 9 10	○ACADEMYでの発表計画完成 ○ACADEMYに向けての発表準備 ○コース内リハ、コース外リハ	18	・拡大実行委員会にて検討 ・発表プログラム、シナリオの作成 ・コースを解体してのリハーサル実施～修正 (鳩翔サポートセンターの方からアドバイスを頂く)
DOVE ACADEMY (12)			
	○ACADEMYの振り返りと次年度に向けた提案	3	・ACADEMYの振り返りを後輩へ引き継ぐ
11 12	○レポート作成	14	・レポートのガイドライン作成、レポート完成 ・次年度以降の追究課題検討
1 2 3	○追究活動	4 6 (4)	・次年度のDOVE ACADEMYの検討
合 計		70	

学 習 対 象	学 習 事 項
① 専門分野に関わる、深化した新たな課題への挑戦	1) 探究したいグループ研究の内容を絞り込み、研究計画を立案する。 2) 深化した課題に関わりながら地域で活躍している人々と交流し、研究を深め、実践活動に向けた計画を立案する。
② 専門分野の抱える課題の克服に取り組んでいる人々の生き方	1) 理想の生き方に近づくための実践活動に必要な情報（先行研究、地域や行政、企業等で行われている取組の有無）を幅広く調べる。実際に訪問したり、行われている活動に参加したりして経験を積む。 2) 長期休業や休日を活用し、調査・研究した内容を専門家に提案し、または企業等で実践させてもらい、評価やアドバイスをいただく。実践内容を修正し、再提案、再実践することで研究を深める。
③ 自分がこれまで身に付けた研究成果（専門的知識や活用した資料）→DOVE ACADEMY	1) 自分の考えを発信し、双方向でのやりとりを通じて認めてもらったり、アドバイスをもらうことで学ぶ楽しさを実感する。 2) 他者の意見を取り入れ多面的・多角的な考え方を身に付ける。 3) 実践活動と発表を通して、3年間の研究の集大成を実感する。
④ 3年間の総合的な学習の時間のまとめや振り返り	1) 得た知識や技能、思考・判断等を言語化し、研究成果をまとめる。 2) 自分の成長を実感するとともに、目指したい理想の生き方を問い直し、高校での新たな生き方の追究に対する見通しをもつ。

IV 2年度実践記録

1 1年部

園児の安心・安全をくども園いずみ風の遊育舎>

こども園を訪問し、園児との関わりや園の仕事を経験した。園児と関わる際には、手のつなぎ方など普段考えないような事も工夫する必要があり、働いている人が細かい工夫をしているのだと分かった。また、園児が寝ている間の仕事など、園児が安心して過ごせるように工夫していることが分かった。インタビューから、働くことが自分の成長にもつながるといってお話を聞き、働くことが他人・自分の双方に影響を与えることだと分かった。

**私が実感した「働くこと」とは**

1年間の学習を通して、「働くこと」とは他人の生活を支え、自分の未来にもつながることだと考えた。なぜなら、働いている人のお話や実際に体験したことから、その人の仕事は誰かの安心・安全な生活を支えることにつながっていることや、働くことが人生の糧となり自分自身の成長となることが分かったからである。

「人と人との支え合い」この学びを自身の成長に

本生徒は、この職場体験を通して「働くこと」とは人と人との支え合いであり、他人と自分の双方に影響を与えることであると気付くことができた。さらに今後は、働く人の考え方ややりがいが、働く中でどのように変化するのか、また、働いて得たことがその人の人生にどう生かされているのかについて詳しく知りたいという探究心が芽生え、本活動で得たことを吸収し、自身の成長につなげたいという意欲へと変わっていった。

周りの人がいるからこそくグランマート泉店を訪問して>

私がお客様から言われて一番印象深かったのは、「キムチの素」という商品の場所を案内した時に「ありがとうございます。うちの人達、キムチ鍋好きだからすごく喜ばれるんだ。」という言葉だ。自分が関わった商品で全然知らない人達が喜んでくれているんだと思うと少し誇らしい気持ちになった。実際に働いてみて感じたのは、どんな仕事にもやりがいがあって、就きたかった職業に就いている人もそうでない人も、自分の仕事の本当の価値を自分なりに見出し、それが働く意義となっていること。また、それを得ることは周りの人がいるからこそ成り立っているということ。自分がしていることも誰かの存在の上に成り立っていることを理解し、無責任な行動をしないようにしようと思った。

**働くとは…つながりが生む温かいやりがい**

「働く」ということがイコール労働ではないということを実感することができた。お客様とのつながりが生んだやりがいを「仕事をする意義」としていることは、冷たい響きの労働とは違う、温かいものがある気がするのだ。私も近い将来社会の一員として世に出る時が来るだろう。その時は人とのつながりをやりがいにできるような仕事に就いていたい。

自分の営みも誰かの存在の上に

本生徒は、商品を扱う際の責任感とは相手を思いやる時に生じる感情だと考え、スーパーマーケットで働く人はお客様への思いやりを行動として表しているのだと考えた。それをさらに一般化し、どのような仕事にも必ず相手がいる、働くことの根底には相手への思いやりがあり、それによって仕事が成り立っているのだと気付いた。自分のしていることも誰かの存在の上に成り立っていると感じたことで、学校生活でもより責任をもって行動できるようになった。

福祉の仕事から学ぶ <きさらアーバンパレスを訪問して>

施設内に飾る季節の貼り絵作業では、利用者様に喜んでもらえるように作った。作り終わった時、職員の方から「ありがとう」と言ってもらえて、とても嬉しい気持ちになった。実際に利用者様との関わりはもてなかったが、どの仕事も、常に相手の気持ちを考えた行動が大切であることが分かった。シーツ交換では、利用者様がきちんと寝られるように、しわ一つないように交換する配慮があり、交換の最中に床のゴミが足に付かないよう膝はつかないなど、細心の注意を払っていることが分かった。

自分も相手も幸せに

一日目の朝礼時、鈴木社長が「福祉の仕事は自分も相手も幸せになれる仕事」とおっしゃっていた。実際に体験中、自分が誰かの役に立っていることを実感できる言葉を掛けてもらい、嬉しくなり、社長がおっしゃっていた言葉の意味に気付くことができた。福祉の仕事は、大変なことばかりではないかと思っていたが、大変なことを乗り越え、やりがいを感じていることも分かった。将来仕事に就いた時に、自分が大変だと思ふことを進んでやりきることを大切にしたい。



相手のことを考えた行動を

本生徒は、この職場体験を通して、介護の仕事は常に相手に寄り添い、相手のことを考える職業ということから、働くことは人の心を知る・学べることだと気付くことができた。「相手が何を求めているかよく考えて行動している」という職員の方の言葉や行動から、自分本位ではなく相手のことを考えた行動をとりたいという思いをもつことができた。

働くことの「裏」と「表」 <むさしデンタルオフィス・辻兵商事>

仕事は、裏方の仕事が8割と聞いてとても驚きました。接客業などは華やかな仕事に見える反面、裏に多くの苦労があること、しかしその分、やりきったときの達成感ややりがいを感じて、次への意欲につながると気付くことができました。見えないところで努力している分、見えている部分の表の仕事に自信をもてるのではないかと思います。

「あいさつ」と「信頼」支える仕事

二つの会社に共通していたことは、あいさつなどの小さなことを当たり前にするのでした。些細なことにも気付き、自分から行動できるようになると、信頼される人になると思いました。また、信頼が積み重なっていくと、仕事で思うようにいかないときも周りにいる人たちが助けてくれると教えていただきました。仕事は信頼が結びついて初めてできると思います。あいさつと信頼はつながっているので、これから先ずっと大切にしていきたいです。



「信頼の大切さ」を学校生活とつなげて

本生徒は、一年間の学校生活を通じて、信頼の大切さについて振り返り等で触れている。この職場体験もその一因となったことが一読して分かる。また、信頼は周りへのあいさつや自発的な気配りができることや、感謝の気持ちを持ち続けることによって深まっていくと気付くことができた。この体験での学びは本生徒の日常生活に生かされ、謙虚な気持ちを忘れずに積極的に周りとのコミュニケーションを図り、学級をよい方向へ導くことで仲間からの厚い信頼を得ていた。職場体験が職業を超えた生徒の生き方に結びついたと言える。

秋田と世界のつながりく J I C A 国際交流出前講座

・・・＜元青年海外協力隊隊員、野口聡子さんのお話から＞

僕は今回のお話を伺うまで、J I C A や青年海外協力隊のことについてほとんど知識がありませんでした。また、再生可能エネルギーを生み出すための技術を、秋田から他国に伝授していることも初めて知り、秋田が世界に貢献していることに誇りを感じました。SDG s の達成のために、各国が互いに助け合いながら他国の課題にも目を向けていくことが大切であると気付きました。

私が実感した「働くこと」とは

私は J I C A の活動に興味をもっていて、秋田でも再生可能エネルギーを通じた世界への貢献が高いことをとても嬉しく思いました。現地に行って、現地の人々に直接伝えることで、さらにその国の発展につながると感じました。海外と積極的に関わっていくことにより、日本も学べることもあり、どちらの国にもメリットがあると思います。

「秋田だからこそ出来ること」で社会貢献を

本生徒は J I C A 国際交流出前講座を受けたことで、秋田県と世界とのつながりについて深く考えるようになった。秋田県は今後、どのような形で世界に貢献できるのかを考えたとき、風力発電や農業指導など、自然の力を活用したもので力を発揮するべきだという考えをもつようになった。SDG s への探究心が芽生え、今後の学習を深めようとする意識が強くなっていった。

ローカルをパワーに～SDG s の視点から～

……＜(株)Local Power 代表取締役社長 寺田耕也氏のお話から＞

今回はSDG s と共に、企業についても学ぶことができた。SDG s を企業の活動に取り入れることが、会社の評価につながるというお話があった。会社の評価は利益にもつながるので、SDG s に企業や私たちが取り組むことは、とても大事なことだと再認識した。また、地方であることはデメリットではなく、メリットであること。地方の利点を事業に取り入れていくという考え方が、今までの売り上げにつながっていったのではないかと感じた。私は今まで娯楽施設は都会に多いので、秋田は楽しめないと思っていたが、秋田ならではの遊び方や楽しみがあることを考えることができた。寺田さんの人生経験から学んだことを自分の人生経験にも活かしていきたいと思った。寺田さんと違う形ではあると思うが、地方の発展に携わっていけるような人になりたいと感じた。

1年間の研究から考えた「自分の考える生き方とSDG s」

私がこの一年間の学習で興味をもったのは、SDG s の3番「すべての人に健康と福祉を」と5番「ジェンダー平等を実現しよう」である。世界中の人々がいつでもきちんとした医療を受けられる社会の実現には、今を生きる私たち若者がSDG s の世界の諸問題に目を向けることが必要だと思った。特に5番の「ジェンダー平等」では「男だから」「女だから」を無くさなくてはいけないと感じている。世の中にはトランスジェンダー等の問題を抱えている人も多いので「〇〇だから」という考え方がない社会になればよいと感じた。

Local Power と企業の取組とSDG s

地方に住むということは、デメリットではなくメリットであるという、多角的・多角的な考えで秋田を見つめ、全てをポジティブに捉えていく考え方、そしてそれを実践し成果を出している寺田さんの話は、生徒たちに大きな感銘を与えた。自分たちの住んでいる秋田を見つめ直す機会ともなったようである。また、SDG s について学びながら、世界の諸問題を自分たちの問題と捉え、自分たちにできることから取り組んでみようという思いをもたせることができたのは、今年度の大きな成果である。

他国に対して関心が深まる瞬間 <JICA講演会>

ミレニアム開発目標というものがSDGsの前にあったということは知っていたのですが、どのような成果が出たかは知りませんでした。数値を見たときは、「すごい変化があったのだな」と思ったのですが、野口さんが、「数値が減ったのは人口が多い国が対策したままで改善できていない国だってまだまだたくさんある。数値だけが全てではない」と教えてくれました。また、「No one will be left behind」という言葉を聞いたときは、なんて素晴らしい言葉なのだろうと感動しました。国は違っても同じ人間。差別や貧困などはあってはならないと思います。私は大人になったとき、少しでも他国を支援していけるような人になりたいです。

どのような態度で世の中の諸問題と向き合うべきか

本生徒は、本校に入学する時点で、進路を医療関係の職業として考えていた。そのため、1年次は医療に携わる職業についてのみ情報を収集し、レポートを作成し発表も行った。今年度も医療関係の職業に携わりたい考えに変わりはないが、様々な職業に携わる人の仕事に対する考え方や人生に対する姿勢を学んでいくにつれて、「自分はどのような態度で世の中の諸問題と向き合うべきなのか」を考えるようになってきている。SDGsと向き合うにあたって、JICAより野口聡子氏をお招きして講演をお願いしたが、本校生徒のように普段不自由のない生活からかけ離れた価値観をぶつけない思いは届いたようだ。ひとつの概念に固執するのではなく、バランスのとれた思考をもち、相手の人生観に共感をもって接する人間になってもらいたい。その思いが少しでも伝わっていったのではないだろうか。

秋田だからできること <Local Power代表寺田さん講演会>

私は今回の講演会を聞いて、秋田の見方や感じ方が変わりました。今までは、秋田と都心を比較しており、秋田のマイナスポイントをプラスに変えて考えてみたりはしたことがありませんでした。しかし、今日Local Powerさんの企業の取り組みを聞いて、地方であるからこそ“できるやり方”“秋田のやり方”を学ぶことができました。また、秋田の人口流出の問題を解決するために、「子供世代が秋田を選択する環境作り」をしたいという考え方もすごくいい考えだと感じ、とても心に残っています。今回の講話を聴いて、秋田、そして地方の見方や感じ方が変わった人は私以外にもたくさんいると思います。「SDGs = 会社の評価の基準、安さや利益だけでなく、みんなを幸せにする視点」ということから、現代の社会のSDGsの重要さも理解することができました。

SDGsと地域の諸問題を結び付けどのように解決していくか

本生徒は、興味をもったことや好きなことを一生懸命にやり、目標を達成するためにはどのようにしていけば良いかを考えることができる生徒である。将来は秋田の医療で活躍して地域を活性化させたいと考えており、様々な職業に携わる人の仕事に対する考え方や人生に対する姿勢を学んでいくにつれて、「人の役に立ちたいと思ったときこそ、謙虚で優しい気持ちが必要である」という考えを強くもつようになってきた。SDGsと向き合うに当たって、Local Power代表の寺田さんの講演を聴き、苦しいことや辛いこと、失敗も全てその後の成長に繋がるような生き方をしたいという思いが大きくなり、SDGsと地域を結びつけ探究していこうという意識を強くもつことができた。

3 3年部

(1) コミュニケーション・交流コース

“Laugh”を身に付け、最高の第1印象を

よりよい第一印象を与えるには、「LAUGH」というポイントに気を付ければいいと分かった。この言葉には6つの意味がこめられている。1つ目はL「listen」聞くことだ。相手の話によく耳を傾け、相手の立場に立って話を聞くようにする。2つ目はA「アイコンタクト」見ることだ。相手の目を左右交互に見て、相手を受け入れる承認のサインを送る。3つ目は「understand」理解することだ。相手が伝えた言葉はもちろん、伝えきれなかった部分も自なりに理解して話を聞くようにする。4つ目はG「gesture」分かりやすくすることだ。身ぶり手ぶりをを使って相手により分かりやすく伝えられるように意識する。5つ目はH「反応」頷くことだ。相手が話しているときは、相づちをうったり、頷いたりして「あなたの話を聞いています。」というのを態度で示す。6つ目は、これらをつなげて

「Laugh」笑うことだ。笑顔は気分をよくする効果がある。この6つの内容をマスターすれば、コミュニケーションが苦手な人でも、これ以上ない最高の第一印象を与えることができるはずだ。

**実生活を見つめ直すきっかけに**

この生徒は、自分の弱点である「人見知りを克服する」ということを目的に「人間関係においてコミュニケーションはどのような効果があるのか」というテーマのもと研究をスタートさせた。心地よく感じる会話に関するアンケートを行い、それをもとに同級生と比較対照実験を繰り返し、コミュニケーションを豊にする6つのキーワードを導き出した。普段の生活の中で、意識していなかったことが、多くの効果を生んでいる事実気付き、自分の行動をポジティブ見直すきっかけとなり、自己肯定感をさらに高める研究となった。

(2) コミュニケーション・表現コース

よりよいコミュニケーションのための印象形成を考える

私は「相手に良い印象を与えるには」について研究し、服装や身だしなみ、話し方、言葉、相手との接し方など様々な視点から理解を深めることができた。私が研究したことは、人と人とのつながりを更に強め、滑らかにするだけでなく、AIやロボットの研究にも生かせると考えた。人とロボットの間にある溝を埋めるために、ロボットやAIにも基本的なコミュニケーションの取り方に加え、相手に好印象を与える様々な工夫を取り入れるべきではないだろうか。例えば、マイナプラス法を使った会話で相手を元気づけたり、比較的明るい色、暖かい色をベースにした外見にしてみたりすることだ。これらを取り入れるだけで関係は向上できると思う。また、私が研究した内容は日常生活の中で行われていることでもある。“あの人というとな気分が良いな”“あの人というとな楽しいな”という好印象を与えるため、また、より多くの人と繋がれるようにこれからも「日常からの学び」をずっと続けていきたい。



他者への発信を通して自己を知る

コミュニケーション・表現コースでは、目指したい「理想の生き方」に近付くために、三年間の研究の集大成として、将来社会をリードする人材になるために必要なスキルとしての自己表現法についてそれぞれが研究活動を行った。本生徒のグループでは、現代社会をリードする存在に求められるリーダーシップ像として、代表的な行動理論であるPM理論に基づいて研究を行った。聞き手にポジティブな印象を与えるマイナスプラス法（マイナスな内容＋プラスな内容の語順で伝える）や身だしなみの整え方、ボディタッチ、相手との関わりを意識した会話、姿勢など、入学試験の面接や社会人として必要な知識を、例と実演を交えながら伝えていた。この研究を通して、自分たちにとっても実際の場面でどのように振る舞うことが有益かを確認できた。また、他者への発信について考えることを通して、自身の在り方についても考える機会になり有意義な学習ができたと考える。

(3) 心・体コース

「究極の幸せ」を考える

仕事のみ限定して働いている人が感じる一番の幸せ、「究極の幸せ」を見付けることが出来れば、自分達の将来に役立てられると考え研究を進めた。職業を相手と直接関わる仕事と関わらない仕事の2つに分類し、その仕事の幸せについての共通点を考えた。自分1人では感じる事が出来ない、自分自身のたゆまぬ努力が必ずあるという2つを見出し、それがやりがいへとつながり仕事を続けられる理由だと考えた。また、幸せには、小さな努力を続けること、自分以外の誰かが必要だということに気付くことができた。以上のことから「究極の幸せ」とは、人とつながっていること、また、信頼できる仲間がいることだと考えた。自分だけのことを考えて行動するのではなく、周りにいる人のことも考えて行動するべきだという思いを強くした。



これからの自分の生き方につなげる

どんな職業に就いても、誰もが幸せでありたいと思うが、思い通りにならないことも多い。仕事をする上で大切なことは「やりがい」と「楽しさ」だと気付くことができ、これからも自分なりの考えを見付けて、自分にしかできないことを挑戦しようと思えるようになった。また、この研究を通して、自分の考えだけを押し通すのではなく、視点を考えてみることや考えたことをまず実行するという今すぐに自分にできることを考え、今後の生活に活かしていこうという気持ちが育まれた。

(4) 社会貢献コース

地域密着イベントで秋田を明るくしよう

秋田県では人口減少が大きな問題である。昨年までの研究を生かしつつ、秋田を活性化させる方法はないだろうか。若い世代の人たちが秋田の良さに興味をもち、且つ高齢者の健康寿命を伸ばす。この2つを両立させる手立てについて研究した。男鹿市で地域活性化に取り組んでいるNPO法人「TOMOSU CAFE」を訪問し、①まず自分たちが楽しむ、②より日常的なものを突き詰める、等のヒントを得て、幅広い年齢層が楽しめるイベント企画にたどり着いた。秋田に足りないのは「宣伝力・企画力・発信力」である。若者によるSNS等の活用や具体的な行動が多くの人々に影響を与え、地域全体の活性化につながるであろう、という結論に至った



秋田の良さを「発見」して「磨き」, 「企画・発信」する具体的な手立てを

社会貢献コースでは、「地域社会に何らかの形で貢献する手立てを『具体的に』考える」をコースコンセプトに、6つの班が独自の視点から結論に迫った。各班に共通するのは、①現状や課題を明確にした上で、②可能な限り具体的な手立てを提案・実践し検証する、という研究手順である。「事実に基づいて追究し、新たな価値を創造する」という各教科での実践も生かす取組になっていた。地元の食材に付加価値を加えるために菓子作りに取り組んだり、県民が気付いていない秋田の魅力を発掘したり、先人から受け継いだ豊かな自然環境を未来に引き継ぐために実践すべきことを提案したりと、自分にできることは何かという視点で研究・発表することができた。

(5) 新時代コース

全ての人々が安心して暮らせる空間に…

公共施設は誰もが使いやすく、安心して過ごせる空間にする必要がある。昨年度は秋田市社会福祉協議会や八橋デイサービスセンターを訪問し、バリアフリーやユニバーサルデザインが必要であることを学んだ。学習旅行で訪れた葛西臨海水族園では、グローバル化に対応した施設設計を目の当たりにした。そこで、高齢化率・人口減少率ともに日本一の秋田県の身近な施設はどうなっているか、夏休みに検証した。地域密着型の店舗であるコンビニエンスストアでは、車いすやベビーカーも通りやすい広々とした空間、幅広い品揃え、立地にあった商品を置くなどの工夫がされていた。これまで学んだことをもとに、全ての人々が安心して過ごすことのできるコンビニエンスストアの空間設計をし、DOVE ACADEMYで提案した。ACADEMYで発表する際の教室のレイアウトも、聞き手が発表を聞きやすくなるように、展示物の高さをコンビニエンスストアの「ゴールデンライン」(120~130cm)に合わせたり、多くの人々が楽しめる体験型のプログラムを取り入れたりした。研究を通して、「全ての人々のニーズに応える」ことが、人々が安心できる空間づくりにつながると分かった。

新しい時代に求められること

新時代コースは、これからの時代の諸問題について様々な角度から考え、提案した。高齢化が進んだ秋田県の現状は、これからの日本、これからの世界が抱える問題を先取りしていると言える。秋田が抱えている問題について、中学生なりの考えをもち、実践していくことが、未来を支える力をつけることにつながる。本生徒は少子高齢化が進む時代に、誰もが快適に、安心して過ごせる空間づくりに必要なことを、書籍などの情報だけでなく、実際の施設を検証することで体感したことをから、様々な人の目的に合わせることで、そのためにその目的を知るコミュニケーションが重要であることに気付いた。コース全体では、AIやエンタメ、経済活動やSDGsなど様々な視点から、新しい時代に求められることを提案することができた。

Ⅲ 令和2年度の実践記録（秋季授業研究）

－授業記録（全学年）－

1 単元名（題材名・主題名）

「DOVE ACADEMYを成功させよう」 －批判的思考力を生かして自分の生き方を問い直す－

2 批判的思考力を磨く場面

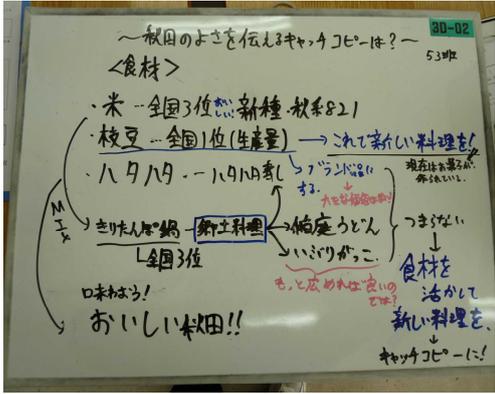
- (1) 全校ディスカッションにおいて、秋田のよさを3つにまとめる話合いをする中で、異なるジャンルから出された意見の共通点が整理され、秋田のよさにより深く迫ろうとする場面
- (2) 進行担当である3年生が、経験や蓄積を生かして話合いを焦点化し、全体でより深く追究したいと思えるポイントに迫っていく場面

3 全体計画（27時間）（「全体的な指導の構想」、「本活動内容の指導計画」）

主 な 学 習 活 動	・指 導 の 手 立 て ◆ 批判的思考力が磨かれていると捉えた生徒の姿	時数
<ul style="list-style-type: none"> ・夏休み成果報告会を行う (各学級, 各コース, 以下同) ・DOVE ACADEMYに向けた発表計画を立てる。 ・DOVE ACADEMYに向けて研究をまとめ、発表準備を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の方向性を確認しながら、内容を自分たちで多面的、多角的に見直すことができるよう、夏休みの取組を紹介し合い、質疑応答で学びを共有する場を設ける。 ・本番でのやりとりの充実が全校ディスカッションに生きることを実感できるよう、双方向性のある発表の具体例を示す。 ・研究の結論をより明確化させ、ディスカッションに向けて自らの研究成果に自信をもてるよう、ディスカッションテーマを念頭に研究成果をまとめるよう助言する。 	<p style="text-align: center;">2</p> <p style="text-align: center;">2</p> <p style="text-align: center;">8</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・リハーサル及び修正を行う。 ・他コースのリハーサルを参観する（3年）。 ・各ジャンルごとに秋田のよさが伝わるキャッチコピーを考える。 ・全校ディスカッションを実施する。 (DOVE ACADEMY 1日目) 	<ul style="list-style-type: none"> ・より納得のいく発表ややりとりに改善できるよう、他コースのリハーサル参観時には、批判的思考を生かして自分や仲間の発表を見直すよう働きかける。 ・より具体的な視点から秋田のよさに迫ることができるように、事前にジャンル別の班でキャッチコピーを考えるミエルトークを行う。 ・秋田のよさに対する自他の提案を多面的な見方で問い直し、考えを深められるよう、キャッチコピーのジャンルごとの話合いの後に、全校ディスカッションの場を設定する。 	<p style="text-align: center;">12</p> <p style="text-align: center;">2</p> <p style="text-align: center;">本時 13, 14 /14</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・ DOVE ACADEMYを振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究成果と秋田を誇りに思う気持ちを結び付けたキャッチコピーを作成し，成果を互いに共有しながら活動を振り返る場を設けることで，DOVE ACADEMYを通して理想の生き方への視野が広がった実感が得られるようにする。 	<p>1</p>
--	--	----------

4 授業の実際

過程	学習活動 ■教師の発問等	教師の手立て ○見取った生徒の姿
<p>問 い の 練 り 上 げ ・ 課 題</p>	<p>1 各班が，前時までに考えた「秋田のよさが伝わるキャッチコピー」を，各会場のモニターで見て，それを作成した理由などを紹介し合う。</p>  <p>キャッチコピーに込めた「秋田のよさ」を3つで表そう</p>	<p>◎全体司会の生徒が，各ジャンルのいくつかの班の代表者に，キャッチコピーを作った理由を質問する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 四季豊かな秋田 ・ 世代を超えて Let's have! ～秋田を食べ尽くそう～ ・ やさしさあふれるあったか秋田 ・ #A lot of 伝統 ・ 香り杉 味よくし杉 秋田杉 <p>○各班のキャッチコピーを，興味・関心をもって確かめ，それを作成した理由の共通点を考えている。</p> <p>◎全体司会の生徒が，キャッチコピーを作った理由に共通点があることを指摘し，複数あるジャンルの共通点を3つ程度に整理することで「秋田のよさ」により深く迫ることができるのではないか，という仮説を提案する。</p> <p>○みんながキャッチコピーに込めた要素の共通点を明らかにして，「秋田のよさ」を確認したいという課題意識を共有している。</p>
<p>課 題</p>	<p>2 各会場ごとに「秋田のよさ」について話し合い，3つの要素にまとめる。</p> <p>(1) 各班ごとにキャッチコピーに込めた「秋田のよさ」を再確認する。</p>	<p>◎各会場のミセルさんが，キャッチコピーを作成する話合いで各班が使用したホワイトボードを各班で見直すよう指示する。</p> <p>○各班の意見を尊重しながら，目的や話題に沿って発言したり，ジャンルごとの考えをまとめたりしている。</p>

追	(2) 各班からの意見を集約し、「秋田のよさ」を3つの要素で表す。	○共通点や相違点を整理し、考えをまとめたり発言したりしている。
究	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンルごとの会場に、それぞれアシスタント・ミセルサンをおく。 ・ジャンルごとに、全体のミエルトークでパネリストを務める代表生徒を一人決めておく。 	
問	3 全校で話し合い「秋田のよさ」を3つの要素に絞り込む。	
い	(1) 各ジャンルの結論を紹介する。	<ul style="list-style-type: none"> ○「食材ジャンルでは、素材，加工，地域独自の食材の3つを考えた」 ○「伝統ジャンルでは、伝統が引き継がれている，伝統が多い，それを基に新しいことを考えている，の3つを考えた」 ○「県民性ジャンルでは，健康で文化的な最小コストの生活，節約家，秋田美人，の3つを考えた」 ○「気候ジャンルでは，緑が多い，四季がはっきりしている，伝統につながっている，の3つを考えた」 ○「特産品ジャンルでは，伝統工芸品，食，オールマイティー，の3つを考えた」
直	(2) 各ジャンルの結論を分類する。	<ul style="list-style-type: none"> ○「四季がはっきりしているという意見があったが，生活していてそこまで実感がないのでもう少し詳しく説明してほしい」 ○「雪が降らない地域と比べ，雪が多く降るので四季を感じやすいと思う」 ○「県民性で穏やかであると意見があったが，私は口調が強い人が多いと思う」 ○「口調が強いことも確かである。地域のつながりが強く，地域の中では穏やかであると考えた」 ○「伝統ジャンル意見の人の発見にあった，意識が長く続く理由について分かりやすく説明してほしい」
し	<ul style="list-style-type: none"> ・全校ディスカッションの司会進行担当の生徒（全ミ，全ア）が，各会場との協議を進める。 <p>(3) 各会場をつないで全校生徒でミエルトークを行い，3つの要素に絞る。</p>	



- 「全国に比べ昔から長い間続いている祭りが多いということである」
- 「秋田の気候を生かした食べ物として米という意見があった。それは他県にもある。本当に秋田の気候を生かした食べ物を教えてほしい」
- 「特産品ジャンルが考えた秋田の3つのよさは、他県でも同じことが言えるのでは」
- 「特産品に、秋田ならではの伝統や文化が反映されていると考えている」

○話し合いの流れから、優先的に話し合うべき論点・争点を見極め、議論をリードしていた。

○ホワイトボードを用いて、形のある「もの」と、見えにくい「もの」とに分けて意見を整理することにより、共通点には、秋田を支える人々の思いやよさなどが多いことを見える化している。

○「伝統や職人さんの技術を昔から引き継いできた人の思いがある」

○「伝統を引き継ぐためには団結力が必要だ」

○「受け継がれてきたものを発見し、新しいものを引き継いでいく一人一人の自覚が大切」

ま
と
め
4 本時を振り返りながら「秋田のよさ」と、それが自分の「理想の生き方」に与える影響についてまとめる。

○「目に見えるものは、目に見えない人の思いや力などに支えられている」

○「県民一人一人が昔からの思いを大切に自覚し、今に受け継いでいる」

《生徒の振り返りから》

- ・秋田のよさを再確認したり、発見したり、これからの生き方につながる双方向的な時間であった。
- ・竿灯、かまくら、きりたんぼなど全国に有名なことが秋田のよさだと考えていたが、ものではなく人の思いが大切だと考えることができた。
- ・今日の授業の話し合いを通して、秋田のよさについて今後も考えていきたいと思った。
- ・他の人の意見を聞くことによって、自分の考えとの違いに気付くことができた。学校生活にも生かしていきたいと考えた。

5 省察

- (1) 全校ディスカッションにおいて秋田のよさを3つにまとめる話し合いをする中で、異なるジャンルから出せられた意見の共通点が整理され、秋田のよさにより深く迫ろうとする場面

学年の垣根を超えて意見を述べ、各ジャンルに質問する場を設定することで、自分たちの考えとの根拠の違いや共通点に気付くことができた。また、ミエルトークの手法を用いて、各班の話し合いのホワイトボード、各ジャンルごとの話し合いの板書、全体のミエルトークのホワイトボードを用いることによって、思考を可視化し考えを深めることができた。しかし、オンラインの授業での思考の可視化について課題が明確になった。全体のミエルトークでは、考えを可視化したホワイトボードを映す場面が少なく、議論が深まらなかった。今後の授業に向けて改善していかなければならない。

- (2) 進行担当である3年生が、経験や蓄積を生かして話し合いを焦点化し、全体でより深く追究したいと思えるポイントに迫っていく場面

I C Tを使ってオンラインでの話し合いを進めるという初めての取組の中で、多様な意見を引き出し、その意見に切り返しの質問をしながら比較、統合、分類を通して意見を集約することができていた。理想の生き方を考える際に、表面的なよさを考えるのではなく、そのよさを支える人の姿や思いに目を向けることが大切であった。各ジャンルのパネリストが出した意見の根拠について問う場面で、さらに話し合いを焦点化できれば、生徒自身が理想の生き方について、人の思いに迫りながらより深く考えることができたのではないかと考える。

一本実践から見えてくることー

「批判的思考力を活かして自分の生き方を問い直す」は本当にできていたのか？

共同研究者：

(秋田大学教育文化学部・地域社会・心理実践講座) 森 和彦

1 本研究における「批判的思考力」とは

研究の構想には1) 論理的に偏りなく考える力、2) 他者の立場で考え、議論する力、3) 新たな価値を創造する力、とあり、さらに1) -1 根拠となる情報を探し続け、客観的に考察している。1) -1 できる限り正確な情報を根拠にして、自分の考えを内省している。

1) -1 根拠となる証拠や理由などが不足しているときは、判断を保留し、熟慮している。3-1 事象が持つ多様な側面に気付いたり、同じ側面を多様な角度から捉えたりしている。とある。これに、

2 宮元(2009)による、批判的思考

- 1) 議論の根拠が十分に信頼するに値するかどうかの検討
- 2) 保留した場合には適切な判断を下すにはさらにどのような情報が必要かの検討
- 3) 経験的知識はさらに観察することによって修正されうる、ということをも理由にどの知識も誤りうるということが判明する可能性を承認する。
- 4) この批判的思考を育てるには問題意識を持ち(問いを立てる)、論理や前提となる仮定を理解し、他の可能性を考え、評価し、探求する。

を加えると・・・

3 全体ミエルトークでの疑問

そのキャッチコピーは本当に正しいか？前提となる吟味は各学級や各コースで行われてきたとしても証拠となる出典は全大会でも触れておかなければいけない。そして多様な可能性を吟味したうえでキャッチコピーなら

ば、その道筋は評価に耐えるはずである。実際に様々な批判的意見は確かに一部見られたが、ナンデさんは証拠に基づいていたのか？ミセルさんは証拠や論理に基づいて説明していたのか？と突っ込みどころが多い。

- 1) 今の秋田は本当に四季豊か？本当に四季がはっきりしている？豊かの定義とは何？隠れた特産品を探さないのか？
- 2) 秋田の人は本当に儉約家か？口調が強い人が多いとする主張の証拠は？
- 3) 県民性ジャンルで「秋田美人」なる言葉が、多様な人の立場に立った時、各部会での議論の末に本当に出てくるのか？
- 4) ネットに載っている内容は本当に信じてよいのか？証拠を探したのか？他の可能性について各部会でどのように吟味したのか？
- 5) 「・・・と考えたからです」、「みんなそう思っているはず」は根拠にはならない。

4 指導のポイントは何か？

- 1) 教師自身が問いを立てる知的探求のモデルにならなければならない。
- 2) 議論を「主張+理由付け」だけではなく、1 根拠となる事実の出どころ真偽の確認、1 理由付けの多視点からの正当性評価、1 おかしいからダメではなく、その背後にある暗黙の仮定、前提、条件枠組みを掘り出して、その可能性を吟味する作業をつける。
- 3) これらの議論は少人数ミエルトークで理論武装されていなければならない。

5 ここまで述べて考えたこと

これは正直ものすごくめんどくさいプロセスである。コミュニケーションは本来、省略による単純化(まさにキャッチコピー)、価値観などのフィルターをくぐり抜けた歪曲化、感覚情動体験に基づく思い込みの一般化で分かりやすく使われてしまう。だからこそ、批判的思考が大切であり、自分の身を守るだけでなく、世界をより良いものに変えていく力にもなるのだが。